チュチェ思想の原理解説 2

人類の社会を明るく照らす チュチェののろし



チュチェ思想の原理解説 2

人類の社会を明るく照らす
チュチェののろし

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026

はじめに

今日の世界には、自然と社会という大きな領域がある。

振り返れば、人類は社会の中で横暴な自然を改造し、自分に奉仕させながらその生を繋いできた。

社会は人間にとって一刻も離れることのできない生の拠り所、生活の舞台である。

魚が水を離れて生きていけないように、小鳥が空気なしに飛べないように、人間は社会から離れて生きていけない。人間の生が始まり、それを繋げてくれる生の拠り所がほかならぬ社会であるため、私たちは社会を貴重にし、美しく作り変えなければならないのである。

そのためにはまず、社会を照らす明るい光でそれを解剖して見なければならない。

家の中が明るくてこそ家事がうまくいくように、社会を人類の志向に即して立派に作り変えるためには、その面貌を明らかにする偉大な思想理論が必要である。

人類社会の黎明期から長い間、社会と人類の前途を明らかにしようと多くの思想家たちが歴史の舞台に現れ、それぞれの思想と理論を打ち出したりした。しかし、人類は自分自身を歴史の主人として堂々と押し立てる真の思想を探せずにいた。

20世紀に入りながら世界には、チュチェと呼ばれる新しい哲学思想が登場した。

天才的な思想家・理論家である偉大な金日成(キムイルソン)主席が創始し、思想理論の英才である偉大な金正日(キムジョンイル)国防委員長が深化、発展させた人間中心の哲学思想であるチュチェ思想は、人類に与えられた新しいのろしであった。不世出の偉大な思想家たちが高く掲げたこのチュチェののろしは、今日、自然と人間だけでなく社会も新しく、明るく照らしながら

人類社会の領域を異彩あるものにしており、人類の進歩と発展を力強く促している。

　チュチェの輝かしい光があって自然と社会、人間に対する全ての原理が新しい面貌を整えて人類の思想史に新たに出現した。

　本書ではチュチェ思想の社会歴史原理について解説しようと思う。

　読者たちは本を読みながら、自分の生活する社会の面貌とその変化、発展の過程、そして社会歴史を主導していく主人公は誰であり、社会が果たしてどういう道に沿って前進していくのかについて理解するようになるであろう。

目　　次

1. 開かれる人間社会の大門

　われわれはこれから、世界で暮らしている全ての人間に社会に対する正しい認識を与えるために、社会の大門を開いてみようと思う。チュチェ思想の社会歴史原理は、社会の本質、社会歴史の主体、社会的運動の本質的特性という体系で構成されている。

　この章では社会の本質について見ることにする。そのために、われわれはこの章の体系を「社会には人々が集まって生きている」「歴史を通じてみた社会の類型」の二つの体系に構成した。

1）社会には人々が集まって生きている

特出した世界的出来事ー社会の出現

　今から100万年前、地球上にはその歴史上類例を見ない一つの大きな出来事が起こった。

　それは、ある火山の大爆発や大地震でもなく、地球と他の惑星との破壊的な衝突でもない。

　それは200億年という太古の宇宙自然の歴史上いまだかつてなかった出来事、人類社会の出現であった。

　人類の誕生と社会の出現、まさにそれがために世界はとうとう旧態依然とした本来の歩みを止め、自然と社会の相互関係の中で歩みを共にする新しい転換期を迎えるようになったのである。

　社会は出現するや否や、その特出した威力を自然の前で誇示しながら永久ツンドラのような自然の世界に果敢に進出し、長い間居眠りをしていた未開拓地を振動させながら至る所で自分のユニークな痕跡を残していった。

　社会領域の急速な拡大により今日、広い世界舞台では広大無辺の宇宙

自然の利用と変革に限らず、人類の生活と運命においても、それこそ新しくも大きな変革が起こっている。

　自然と社会を包括する広大な世界の変化、発展において主人は、ほかならぬ人間である。こうした人間が社会を成して生き、活動することにより、世界が人間を主人とする人間の世界に転換されることは決まっている。

　人間を主人とする世界の変化、発展について正しく知るためには、世界の特異な領域としての社会の本質と、その変化、発展について知らなければならない。

人々が集まって生きる「家」ー社会的集団

　われわれはこの部分に対する解説を、金正日国防委員長の教示から始めようとする。

　金正日国防委員長は、社会現象に対する明哲な洞察に基づき、1992年1月3日に発表した著作『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』において、社会とは何かについて科学的に定義づけた。

　金正日国防委員長は次のように述べている。

　「社会とは一言で言って、人間が集まった集団です。人間が社会的財産を持ち、社会的関係で結ばれて生活する集団がすなわち社会なのです」

　人間は、一人では生きていけない。

　社会とかけ離れた人間は、植物にたとえれば落ち葉と同じである。人間は社会的集団を成してこそ、人間らしい面貌を備えて生きることができ、自らの知恵と力を十分に発揮しながら、壮大な世界を自分の要求通りに支配していくことができる。

　人間が社会的存在として自らの生存と発展を図る道はひとえに、互いに集まって社会的集団を成して生きることにある。

　人間の集団は一定の生活上の要求と利害関係から出発して成された、目的意識的な結合、組織的な結合である。人々がこうした社会的

関係で結合し、自然と社会を改造、変革しながら自分の運命を切り開いていく基本単位が、ほかならぬ社会的集団なのである。

ここで留意すべきことがある。それは社会が人々の集団であるからといって、社会に人間だけがあるのではないということである。

前述したように社会には、人間以外にも社会的財貨、社会的関係がある。

人間は赤手空拳で、そして孤立しては生きていけない。人間が生きていくためには、衣・食・住に必要な社会的富がなくてはならず、相互に生産物を交換する協力関係も成されなければならない。

生産工程一つを見ただけでもそうである。

トラックや船、飛行機を作る生産工程には、各種の金属材料と化学材料など、クレーン、ロボット、コンピュータなどの生産道具が利用され、設計家、工程技師、製作工など多くの人々が参加する。こうした協力関係は生産活動でのみ成されるのではない。国家政治活動も、文化芸術活動もみなこのように行われる。

実際に社会の現実がこうであるため、チュチェ思想は、社会には人間だけでなく社会的富と社会的関係もあるというのである。社会的富が人々によって創造され利用される物質的・文化的手段であるなら、社会的関係は、社会生活の過程で結ばれる人間同士の関係であると言える。

ではこの三つの構成部分が同等に社会の存立と発展に作用するのか、ということである。

この三つの要素が社会の存立と発展に必須的であることは間違いないが、その地位と役割においては大きな差を持っている。

これにはより中心的な地位を占めて主導的な役割を果たす中核的構成部分、つまり主人がある。では社会のこの三つの構成部分のうち、全てを統率し、導いていく真の主人は何であろうか。

社会の真の主人は人間

社会の各構成部分は、太陽系の天体の運動でのように均等な力学的

関係を成しているのでもなければ、動物界の食物連鎖のように自然発生的な生存関係を成しているのでもない。

自然とは異なって社会にはそれを支配する主人がおり、それによって全ての社会的事象が連携を結んで変化、発展している。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「社会は人々と、彼らが作り出した社会的財貨と、それを結び付ける社会的関係からなっています。ここで主人となるのはあくまでも人間です」

チュチェ思想は、二つの側面で人間が社会の主人となる根拠を挙げている。

第一は、社会が人間を第一の構成要素としているからだという点である。

人間を抜きにしては社会の発生も、その存立と発展もあり得ない。今まで科学的に考証された世界考古学の資料によれば、人間の発生と社会の発生はその時期を同じくしているという。

社会の発生は人間と切り離せないほど結び付いている。こういうところからチュチェ思想は、社会的富や社会的関係ではなく、人間が社会の真の主人であるというのである。

第二は、人間が社会の全ての変化、発展において主導的な役割を果たしているという点である。

社会には既に多くの財貨が蓄積されており、社会と人間の発展において果たすその役割は日増しに大きくなっている。しかし、社会的富や社会的関係は人間が出現して初めて作られた人間の創造物として、その創造と変化は全的に人間にかかっている。

今まで創造された社会的富は実に膨大であり、その役割は日増しに大きくなりつつある。だからといって、社会における人間の役割が弱化されたと見てはならない。

一部の人が知識経済時代である今日、コンピュータなしには生産が成されないといって人間を無視したり、情報手段の役割を過度に評価

したりするのは近視眼的な思考である。

社会の全てのものは、最終的にはもっぱら人間の知能と役割にかかっている。

社会関係も同じである。

社会関係は複雑であり、それが人間の運命とその生活に、そして社会的富の増加に与える影響は少なくない。そのため、社会の存立と発展において社会的関係を決して無視することはできない。では社会的関係がどのように成され、人間との相互関係はどうなのかという問題を上程させてみよう。

社会的関係はいくら複雑に絡んでいても、その大半が狭い範囲では人間同士の対話を通じて、広い範囲では国と民族間の相互関係を通じて、言い換えれば人間、社会的集団を通じて結ばれ、成される。

もちろん今日、インターネットの急速な普及によりネットワークが世界的な規模で大々的に形成されて人間同士や国家間の連携がより密接になるなど、各種の近代的手段が社会的関係をより合理的に、便利に変えていく上で大きな役割を果たしているが、それらも皆人間によってコントロールされるものである。

以上で見たように、社会的富を作り出し、利用するのも人間であり、全ての社会的関係を結び変化させるのも人間であるため、人間を社会の創造者、管理者、利用者だというのは当然なことである。

社会の主人は、まさに人間である。

2）歴史を通じてみた社会の類型

人間が生まれて幼児期、少年期、青年期、中年期、老年期を経るのと同じように、人類もさまざまな発展段階の社会制度を経過してきた。

人類社会が創造されて以来、今まで出現した社会の類型は一つや二つでない。

ここには、歴史博物館や通俗的な歴史教科書で見られる、すでに衰退没落した社会があるかと思えば、いまだに存続しながら人類の生活と世界の変化、発展に一定の影響を与えている社会もある。

一方では社会の発展を甚だしく阻害した反動的かつ非人間的な社会もあった。

人類はさまざまな類型の社会を作ってその中で生活してきながら多くの紆余曲折も経たり、自主的な生を目指して創造と闘争の道に出たりした。社会を変化させていく平坦でない歴史的過程で人間に合わない社会は変革的な闘争を通じて覆した。

もちろん全体的に見るとき、進歩的人類の激しい闘争により歴史の流れが退歩ではなく、進歩と変革の方向へと進んできたということは言うまでもない。

では曲折の多い人類史の発展過程で、人間が作った社会はどういう社会であり、人間の理想を実現する社会はどういう社会であるかについて、歴史を遡及して見ることにしよう。

階級的対立の初の産物―奴隷所有者社会

奴隷所有者社会は、国家主権と生産手段、奴隷に対する奴隷主階級の完全所有に基づく初の搾取社会であった。

この社会で階級が初めて生まれ、階級間の差と矛盾、葛藤、対立が生じ、支配して搾取する階級と支配され搾取される階級が形成された。

その構成を見れば、基本階級は奴隷と奴隷主であり、その他に一部の手工業者と小農民がいた。

奴隷主階級はこの社会の主人として国家主権と土地をはじめとする基本生産手段、ひいては奴隷まで完全な所有物にし、奴隷たちを過酷に搾取した。

当時、この社会で勤労大衆の基本を成していた奴隷たちは、圧迫され蔑まれる被抑圧、被搾取階級であり、奴隷主の意のままに処分

される「話す道具」に過ぎなかった。

古代ローマ法典のある条項にもあったように、「奴隷は動物であり、品物」であった。

当時、奴隷たちは動物のように数えられ、生命のない品物のように配られたり、売買されたりした。

奴隷の境遇がどうであったかは、古代ローマの時代、ローマ人たちが農場の道具を三つに分類したところでも明白に現れている。

彼らは農場の道具を ①明白に話すもの ②曖昧に話すもの ③全く話せないもの、に分類したが、ここで一番目の場合が奴隷であった。

奴隷たちは主人が死んだり、または大きな宮殿を建設する際には、いけにえとして主人のお墓の中や建物の礎の隣に生き埋めされたりした。一方、手工業者たちと小農民の境遇も奴隷たちと別に差はなかった。彼らは奴隷所有者たちの搾取と抑圧を受け、日を追って零落して奴隷に転落した。

奴隷所有者社会では奴隷所有者の人身的従属から脱するための奴隷の闘争が激しく起こり、それによってこの社会は崩壊した。

世界に知られているB.C.74年～B.C.71年、ローマで起こったスパルタクス奴隷暴動をはじめとする奴隷たちの暴動は、奴隷主階級に甚大な打撃を加え、奴隷制度そのものを根こそぎ揺さぶった。

奴隷所有者社会が崩壊した後に生まれた搾取社会は、封建社会であった。

身分の社会ー封建社会

封建社会は封建地主、領主たちが国家主権と生産手段を握って、農奴、農民たちを過酷に抑圧して搾取した社会であった。

封建社会が存続した時期は、朝鮮では高句麗が建国されたB.C.3世紀から19世紀の中葉までであり、西ヨーロッパでは西ローマ帝国が滅ぼされた5世紀からイギリス・ブルジョア革命の前夜である17世紀の半ばまでである。

封建社会は、奴隷社会を交替して生まれた、他の類型の搾取社会として、この社会では奴隷社会とは異なって露骨な支配と搾取形態ではなく、身分や土地を通じたより狡猾な、間接的支配と搾取形態が支配していた。

封建社会で支配階級は、宗教を利用して農民たちに対する搾取と抑圧を隠蔽しようとし、その過程で宗教的な幻想が全社会に流布され教会の精神的独裁が支配するようになった。

後世の人々が中世を指して「宗教の世紀」と呼ぶ理由がここにある。

封建社会で全ての権力は最高権力者である皇帝や国王、法王に集中され、彼らによって国家活動が行われていた。

封建支配階級は身分制度に勤労人民大衆を縛り付けて政治的に抑圧し、全ての階層はそれぞれ一定の身分に属して従属と支配を受けた。

封建社会の基本階級は地主（封建領主）と農民であり、その他に手工業者、商人たちがいた。

封建地主は搾取階級、支配階級であり、農民は被搾取、被支配階級であった。

封建社会で勤労人民大衆に対する封建地主階級の抑圧と搾取は身分制度によって合法化されていた。

封建社会で支配階級—搾取階級は特権的身分であったし、被搾取階級は低い身分に属していた。

特権的身分に属したものは、国家の高級官吏になり得、租税と賦役から免除され、罪を犯したときも減刑の対象となっていた。

低い身分の人々は代を継いで搾取と抑圧、蔑視を受けなければならなかった。このように身分制度の基礎にはその社会の階級関係が置かれてあった。身分制度は一旦確立された後は、階級関係とは相対的独自性を持って世襲的に維持されてきた。

封建社会で基本生産手段は土地であり、封建地主と領主たちは多くの土地を掌握して農奴と農民たちの労働や労働生産物を封建地代の形態で搾取した。

封建社会でも人民大衆は決して手を拱いて死の道を選ぼうとばかりはしなかった。

中国の歴史上だけでなく世界の歴史上でも中世反封建闘争の序幕として知られているB.C.209年に起こった中国秦始皇の封建王朝に反対する陳勝・呉広の乱から始まって西方と東方総じてほぼ2000年間も起こった農民たちの反封建闘争によって、絶対のように見えていた封建社会が漸次崩れていった。

封建社会の次に出現した社会は、最後の搾取社会であり、歴史上最も反動的な社会である資本主義社会である。

黄金と資本の活躍舞台ー資本主義社会

資本主義社会は、ごく少数の資本家階級が国家主権と全ての生産手段を独り占めして、勤労人民大衆を抑圧、搾取する、人類の最後の搾取社会である。

資本主義社会の特徴は、それが搾取社会の最後の段階として、中世の宗教的及び政治的幻想によって隠蔽されていた搾取を公然としていて破廉恥なもの、直接的で残忍なものに転化させ、人間の人格的価値を交換価値に転換させたところにある。

資本主義社会で少数の搾取階級はあらゆる権利と自由、享楽をみな享受するが、労働者、農民をはじめとする広範な人民大衆は初歩的な自由と権利も持たずに人間以下の生活をする。

資本主義社会で資本家階級は、身分的従属から解放された勤労大衆を賃金奴隷に転落させて搾取する。

封建社会の身分制度の代わりに、今一つの搾取道具として登場したのが黄金と資本であった。黄金と資本が支配することからして「黄金万能の社会」と言われている資本主義社会では、人々の身分関係が交換関係に転換され、勤労人民大衆に対する搾取と略奪が露骨に、公然と敢行される。この社会で何の生産手段も持っていない勤労者たちは、資本家階級に雇用されて自分の労働力を売らなければならない。

「お金はこの世の神である」

これは、黄金万能の資本主義社会の本質を含蓄した言葉である。人間の上にお金があり、お金が政治をし、物を言う転倒した社会、金に比べれば人間は三文の価値もない社会、人間ではなくお金が物を言う社会が資本主義社会である。

早くからマルクスも言ったように、この社会では暴力的抑圧の代わりに買収が現れ、剣の代わりにお金が社会的権力の最も主なテコとなったのである。

資本主義社会で労働者階級をはじめとする人民大衆は、社会生活の全ての分野であらゆる無権利と蔑みを強要される。

資本主義社会は、国内の人民だけでなく、他の国と民族も侵略し略奪することをその本性とする、最も破廉恥で横暴な搾取社会である。

資本主義は個人主義をごく少数の資本家階級の貪欲に転換させ、個人主義に基づく社会の敵対的矛盾を極度に至らせる。

資本主義社会では個人の利益が最高の理想と目的となっており、個人の蓄財と享楽のために他人を犠牲にするのが普遍的な現象となっている。資本主義社会では日を追って「富益富、貧益貧」（富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しくなる）の現象が拡大されつつある。

経済がいくら発達しているとしても労資間の矛盾と対立、貧富の格差と失業危機、経済恐慌、不景気のような資本主義社会の不治の病は治せず、資本の搾取的、略奪的本性も変わらない。

経済の発展が決して資本主義社会の階級的矛盾と対立を解消させず、人民大衆の自主的要求を実現させることはできない。

高まる人民大衆の自主的要求と日増しに深刻になっている資本主義社会の不平等と不均衡、反動性と反人民性からして、それは必ず滅亡する。

個人主義に基づく資本主義社会が集団主義に基づく社会主義社会へと移行するのはたがうことのできない歴史発展の法則である。

個人主義に基づく資本主義社会の滅亡は不可避である。資本主義社会の滅亡の産物はすなわち社会主義社会である。

社会主義社会は資本主義社会に反対する闘争の過程で人民が打ち立てた新しい社会、あらゆる搾取と抑圧が一掃される先進的な社会である。

社会主義社会

過ぎ去った社会の全期間、人々は搾取と抑圧のない社会を切に念願してきた。その世紀的念願は、数千年の歴史の中で陣痛をなめただけで、一度も実現されたことがなかった。

やがて人類の理想が実現される社会は見いだされたが、それは資本主義社会でも、封建社会や奴隷社会でもなかった。

それは、社会主義社会であった。広範な人民大衆の理想を実現する社会は、ほかならぬ社会主義社会である。

社会主義社会の真面貌については、朝鮮人民が営んでいる社会主義的生活を通じて見ることができる。

世紀にわたって国の政治から疎外され、搾取社会で奴隷の運命だけを強要されてきた朝鮮人民は、社会主義を立ち上げたことによってはじめて国家と社会の真の主人となり、政治舞台に登場するようになった。

西側のある政治家は、「朝鮮に特権層があるとするなら、それは人民」であると言っており、フランスのある教授も朝鮮人民こそ国事を討議する「政治家」であり、尊厳のある「統治者」であり、公正な「法官」であると言ったのである。

すると社会主義社会がどういう社会であるため、このように優れているのかということである。

それは何よりも、社会主義社会は人民大衆が主人となっている社会であるからである。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「社会主義社会は人民大衆が主人となった社会であり、一つに統一・団結した人民大衆の創造力によって発展する社会です」

社会主義社会ではかつて奴隷、農奴と呼ばわれ、蔑まれていた労働者、農民など、絶対多数の勤労する人民大衆が社会の主人となっている。

過ぎ去った社会歴史の全期間、どの社会でも主人になれなかった人民大衆であった。その彼らが社会主義社会では社会の真の主人となって搾取階級の独占物となっていた国家主権と生産手段を自らの手に掌握し、自らの力で管理、運営するようになった。

社会主義社会はまた、全てが人民大衆のために奉仕する社会であるというところにその特徴がある。

社会主義社会では、全ての勤労者が皆衣・食・住の権利とそれに必要な条件を国家と社会から実質的に保障されており、安定した職業を持って自らの能力に応じて社会と自分自身のための創造的労働に参加し、労働の結果によって分配されているだけでなく、国家の人民的施策によって多くの恩恵をこうむっている。

以上で見たように、社会主義社会は真の人民のための社会である。

2. 歴史の主人公を探して

前で私たちは社会の本質と歴史的に形成された多様な社会制度について考察した。

チュチェ思想の社会歴史原理の次の部分に該当する体系は、歴史の主体に関する部分である。

この章では社会歴史の主人公、主体が誰であり、彼らがどのようにして歴史の主体としての地位を占め、役割を果たすようになるかについてお話しようと思う。人民大衆が歴史の主体である、そして人民大衆が歴史の自主的な主体となってはじめて自らの運命を自主的に、創造的に切り開いていくことができるというのが、この章の中心的内容である。

チュチェの社会歴史原理は、歴史の主体を人民大衆と見なし、歴史発展において人民大衆が果たす主体としての決定的な役割を科学的に解明することにより、社会歴史が名実共にチュチェの歴史、人民大衆の歴史になるようにした。

チュチェ思想は単なる理論ではない。

それは大きな実践力を持っていて、理論の限界を超越して20世紀を一変させ、東方の国、社会主義朝鮮の現実に立派に具現された。

今日、世界にその名を高く轟かせている人民大衆中心の朝鮮の立派な現実は、チュチェ思想がもたらした貴重な結実である。

ではチュチェ思想が切り開く人民大衆の歴史は何であり、社会主義朝鮮の現実はどうなのか。

1）歴史を動かす人民

以民為天

人々は昔から天を自らの運命を救ってくれる「唯一の絶対的援助者」「救世主」として崇拝してきた。

古代人たちは天を人間の吉凶禍福を主宰する絶対的な存在として崇拝し、封建時代の宗教信者たちは、盲目的な天崇拝意識を利用して、宗教の教理を体系化し、合理化した。

搾取社会の統治者たちは、自らを天の啓示を受けて運命を救ってくれる「天帝」「皇帝」に自称したりした。しかし、歴史の偉大な存在、全知全能な運命の救世主は「神」でもなければ「王様」でもなかった。

天を信ずる者は誰もが例外なく無気力な信者となって無縁仏の運命を免れず、搾取階級に頼った者は従順な奴僕となって不遇な運命を終えた。

では、社会と歴史を切り開き、人々の運命を救う天のような絶対的存在はないのか。

今日、朝鮮人民ばかりでなく世界の人々の中でも大きな波紋を起こし愛読されている本がある。

それは偉大な金日成主席が書いた回顧録『世紀とともに』である。

今日も世人の中で「人類の太陽の全書」であり、「朝鮮革命の万年の財貨であり、革命の教科書」として称えられている回顧録には、金日成主席が指導した抗日革命闘争の道のりがリアルに記されている。

1998年6月まで「第1部　抗日革命編」を8巻で収めたこの図書は、出版されるや否や大きな反響を呼び起こした。

発表されて6カ月も経たないうちに世界60余りの国々から150余りの出版・報道物が回顧録の構成体系と章、節の全文と詳細な内容を我先にと載せ、それが14の外国語で数十万部も翻訳・出版されたので

ある。外信はその普及数において「他の図書を圧倒して第1位を記録」したと伝えた。

回顧録は去る数十年間170余りの国々で研究・普及され、数十カ国で20余りの民族語で出版された。

回顧録がこのように世人の中で大きな反響を呼び起こしているのは、以民為天を生の座右の銘とした金日成主席の一生、人民を最高の存在、天のような存在として押し立て、人民と共に歩んできた一生が感銘深く綴られているからである。

金日成主席は回顧録『世紀とともに』で次のように述べている。

「『以民為天』―人民を天の如く見なす、というのが私の持論であり、座右の銘でもあった。人民大衆を革命と建設の主人として信頼し、その力に依拠するというチュチェの原理こそ、私が最も崇敬する政治的信仰であり、まさにそれが私をして、一生を人民のために尽くさせた生活の本質であった」

この名文の中にあるように「以民為天」―これは早くから主席が打ち立ててきた持論であり、座右の銘であった。

大昔、人々は天を神秘で無限大の力を持つ造物主、天地万物の主宰者と見なしてきた。

結局「以民為天」という言葉は、何らかの神秘な存在や力ではなく、ほかならぬ人民が世界の支配者、改造者、革命と建設の主人、原動力であることを意味するのである。

こういう点から見るとき、主席の以民為天の思想は、人民に対する観点と立場の絶頂であると言える。

これを根本としているため、チュチェ思想は名実共に、勤労人民大衆の自主性を目指す不滅の革命学説、人民に対する愛と尊重の精華として光り輝いているのである。

チュチェ思想の全ての体系と内容には、金日成主席が一生涯座右の銘とした以民為天の思想がそのまま具現されている。

では、主席が天の如く見なした人民は果たしてどういう存在なのか。

「一体人民とはどういう人々なのか」

ここにそれに答える、一つの資料がある。

朝鮮人民が日本帝国主義の軍事的占領から解放された直後のことである。

解放された朝鮮にどういう社会を樹立すればいいかという問題を討議するために、ソ連と米国が共同調査団というものを作って朝鮮に来た。

朝鮮に滞在する間、その代表団は朝鮮での新しい社会建設に対する人民の動向を「調査」しようとした。

その調査の一形式として、米国の代表たちと朝鮮の人々の間に談話があったが、そこで米国の代表は、いわゆる「米国式民主主義」について一場演説をした。彼は人々の前で、米国社会が人民に自由を与え、「豊かな物質生活」を保障する「優れた社会」であると力説した。

彼の大げさな演説が終わることを待っていたある農民代表が、彼にこう聞いた。

「あなたたちは米国社会がよいと言っているが、だったらあなたたちは、農民たちに土地を与えていますか」

すると米国代表は顔が真っ赤になりながら答えに窮した。ぐずぐずしながら答えずにいる彼に農民代表は連続的に質問をした。

「あなたたちの法にも女性に男性と同等な権利を付与するとの条項がありますか」

彼はこの質問にも答えなかった。いわゆる世界の前で万民平等法と宣言した米国の法であるが、男女の平等を裏付ける条項が、どの法にもなかったからである。すると農民代表はまたこう聞いた。

「あなたたちは、米国社会が人民のための社会だと言うが、すると労働者、農民、女性を除けば一体人民とはどういう人々ですか」

米国の代表は、全く口がくっついてしまった。

彼にとって「人民」とはごく少数の資本家たちであったからである。一方、農民代表が言う人民とは、労働者、農民、知識人をはじめとする広範な階層を念頭に置いたものである。

米国代表の人民に対する理解と農民代表の理解を比べながら私たちは、人民に対する正確な解答を得ることができる。

チュチェ思想では人民について次のように定義している。

金正日国防委員長は1994年11月1日に発表した著作『社会主義は科学である』において次のように述べている。

「人民大衆は働く人々を基本に、自主的要求と創造的活動の共通性によって結合された社会的集団である」

多くの人々が集まって生活する社会の中で真の人民は、勤労する人々であり、自主的要求をもって創造的活動をしない人間は人民の隊伍に入ることができない。

これが人民に対するチュチェ思想の観点であり、その根底を成すものであると言える。こういう観点と態度は歴史と現実にも符合し、人民大衆を中心に据えている、チュチェ思想の根本的立場の発現であるとも言える。

では人民大衆の構成部分を詳しく見ることにしよう。

実際、社会の現実に入れば人民大衆を見極めることが決してたやすいことではない。それは歴史的に人民大衆の構成部分が不断に変化してきたからである。

代表的に見て、搾取社会での人民大衆の構成と社会主義社会での構成は本質的に異なる。

大体、搾取社会で人民大衆は、少数の搾取者、支配者によって抑圧され蔑まれる広範な階層を包括する。しかし搾取と抑圧が一掃された社会主義社会では、全ての階級や階層が人民大衆となる。

では、絶えず変化する各段階の社会の中で、多くの社会的集団からなる社会の中で誰が人民大衆であるかを正確に見極めるためにはどうすべきであるのか。

これはその基本尺度を正しく定めるときにのみ解決できる。

金日成主席は回顧録『世紀とともに』において、張蔚華（1913.1.18～1937.10.27、中国の国際主義戦士、財産家）について次のように回顧している。

「私は幼いころから財産の有無や多少によって人を評価しはしなかった。人を評価する基準は、その人が人間をどれほど愛し、人民をどれほど愛し、祖国をどれほど愛しているかということであった。金持ちであっても祖国を愛し人民を愛する人であれば立派な人間と見なし、無産者であっても祖国愛と人間愛に欠けていれば下劣な人間と見なした。一言で言って、思想を基本にして人を評価したのである」

主席の言葉によれば、人民大衆のメンバーであるか否かを分ける基本尺度は、出身ではなく、思想、世界観であると見ることができる。

もちろん各社会には階級が存在しているため、人民大衆という言葉には、社会階級関係が反映されるようになる。だからといって、階級的面だけを一面的に見てはならないであろう。

人間の思想と行動は、社会的、階級的境遇の影響だけを受けるのではない。人々は革命的な影響を受けて先進思想を体得すれば、社会的、階級的境遇はどうであろうと人民大衆に奉仕することができる。

思想は灯台と同じである。

船が灯台に頼って自らの道を探すように、人間は思想に頼って人生の道を探す。

こういう連関の中でこの問題を見るなら、搾取階級に属している個別の人々も自主的な思想を持って革命闘争に参加すれば人民大衆のメンバーになり得、反対に勤労する階級の出身であっても思想的に変質すれば、革命と人民の背信者、敵になり下がりうるという結論に至るようになる。

人民大衆のメンバーであるか否かを分ける基本尺度は、人々がどういう社会的、階級的土台を持っているかではなく、いかなる思想を

持ったかにあると見るべきである。

では人民大衆を規定する基本要因としての思想は、どういう思想であるのかという質問が提起される。

歴史的に人々の活動に影響を与えた思想は一つや二つでない。

人民大衆のメンバーにならせる思想は、何よりも社会主義思想である。

社会主義思想は人民大衆の自主的要求を最も正確に反映した自主的な革命思想である。

社会主義思想を持った人であれば彼がどの階級の出身であり、どこで暮らしているかに関係なく、人民大衆の堂々たる一構成員になり得る。

しかし、ここで逃してはならない点がある。

それは、社会主義思想を持った人だけが人民大衆のメンバーになりうると見てはならないということである。

社会主義思想と共に、愛国、愛族、愛民の思想も人々を人民大衆の一構成員に結合させる思想的基礎となる。

愛国、愛族、愛民の思想は、国と民族の自主性、人民大衆の自主性を貴重にし、愛する自主的な思想であるため、こういう思想を持てば誰もが祖国と民族、人民に奉仕することができ、人民大衆の一構成員になりうるのである。それゆえ、真の愛国、愛族、愛民の思想も、社会の構成員を人民大衆に結合させる思想的基礎となるのである。

人民は歴史の主体

天の如く押し上げた人民をチュチェ思想では歴史の主体と定義づけている。

歴史の主体という言葉は、社会歴史的運動を目的意識的に起こして進めていく、担当者を意味する。

歴史の主体、担当者は人民大衆である。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人民大衆は社会歴史の主体である」

人民大衆が歴史の主体になる根拠は二つである。

まず、かつて起こった全ての社会歴史的変革が人民大衆によって遂行されたというところにその重要な根拠がある。

歴史上にあった多くの進歩的な社会的変革、つまり奴隷解放闘争、反封建闘争、社会主義革命は皆人民大衆の闘争によって起こっている。

次にその根拠は、尽きない創造的知恵と力を持つ人民大衆によって社会の全てが創造されているというところにある。

金日成主席は生前に、この世に全知全能な存在があるとするならそれは人民大衆であると言いながらいつも人民の中に入り、難局がかもし出されれば人民大衆から力を得、彼らに依拠してそれを乗り越えていった。

それゆえ、朝鮮人民は主席を「人民の偉大な領袖」と高く称え、主席の一生涯を「人民のための一生涯」と言っているのである。

金日成主席が以民為天を生涯の座右の銘としたように、この世には人民大衆よりもっと大きな創造的知恵と力を持った存在はない。

ここで強調しておきたいことがある。

それは人民大衆だけが歴史の主体であり、個人は歴史の主体だと言えないということである。それは個人の知恵と力そのものが制限されていることと関連する。

個人の能力は、底知れない泉のように絶えず湧き出る永遠なものではない。

反動的搾取階級も歴史の主体になれない。

彼らは歴史の主体ではなく、歴史の反動である。

彼らは歴史を逆行させ、人民の創造物を抹殺する張本人である。

歴史的に見れば、実際彼らが犯した侵略戦争によって数多くの社会的財貨が破壊、抹殺され、社会が数十年間、数百年間も後退したりした。

歴史に逆らい、逆行し、多くの貴重な社会的財貨を湯水のように使い、焼却した彼らには反動という烙印しかない。

人民大衆の上に君臨して全てを左右したが、結局は自らの運命さえ保存することができなかった古代ローマの独裁者カエサル、20世紀ファッショ・ドイツのヒトラーとファッショ・イタリアのムッソリーニなどは皆そうである。

今も反動的支配層は、機会があるたびに代弁者たちを利用して、自らを偉大な統治者だの、何だのと押し立てているが、実際に彼らは、社会を開拓する何の力も意志も持っていない。あるならば、世界を支配し、人民大衆を抑圧する能力でない「能力」、そして蓄財欲があるだけである。

今日も人民大衆は歴史の主体であるという偉大な真理を無視して、搾取階級とその反動層を称えるブルジョア反動らのデマ宣伝は続いているが、歴史的真理の前でその衰弱性は日に日に露呈されつつある。

2）彼らはなぜ悲劇的な受難の対象となったのか

前では人民大衆が社会歴史の主体であるということについて解説した。

しかし過ぎ去った歴史的現実を振り返ってみれば、人民大衆は歴史の主体でありながらも歴史の主体として当然の地位を占め、役割を果たせなかった時代もあった。かつて人民大衆は、搾取社会で歴史の主体ではなく、歴史の対象となって搾取階級によって悲惨な運命を強要されてきた。

金正日国防委員長は1982年3月31日に発表した論文『チュチェ思想について』において次のように述べている。

「過去の搾取社会において、……勤労人民大衆は少数の支配階級によって無権利を強いられ、搾取され抑圧されて社会の主人としての当然の地位を占めることができませんでした」

私たちは、人民大衆が歴史の主体ではなく、歴史の対象となってきた悲惨な姿を、植民地奴隷の生活を強要された諸国人民の境遇を通じて

見ることができる。またここで、人民大衆が自分の運命を自主的に創造的に切り開いていく歴史の真の主体、自主的な主体になるためにはどうすべきかについても認識するようになる。

植民地民族の悲しみ

人間が一生を生きていく上では、さまざまな悲しみを体験するようになる。そのうち最も大きな悲しみは、国を失った悲しみ、亡国の民になって祖国を離れる悲しみである。

アリランアリランアラリよ
アリラン峠を越えて行く
私を捨てて行く君は
一里も行かずに足いたむ
……

愛する人と別れる悲しい気持ちを歌ったこの「アリラン」は、去る20世紀の初め日本帝国主義によって強要された亡国奴の悲しみを抱き、生きる道を探し求めて他郷へと発つ朝鮮人民に好まれていた歌である。

世の中には、自分の祖国を離れて異国の地で望郷歌を歌いながら生きる人々が少なくない。するとどうして彼らは自分が生まれ育った故郷を離れて、来いと言う人もなく迎えてくれる人もいない、見慣れぬ異国の地へと行かなければならなかったのか。

植民地―そのためであった。

植民地とは、帝国主義侵略者に国を占領され、全ての主権を奪われ、政治的、経済的、文化的に完全に従属されて支配を受ける国、または地域を言う。長い歳月、奴隷の絆と身分的従属、資本の鎖に縛られて受難を強要されていた人民大衆は、植民地によってあらゆる階級的抑圧とともに、民族的従属まで甘受しなければならなかったのである。

世界の陸地面積の5分の1も占めるアフリカ大陸は、1876年当時までも領土の6分の1が植民地であったし、1900年には10分の9が帝国主義者によって占領されていた。

言葉通りに植民地大陸であったアフリカでは、かつて奴隷貿易によってアメリカに連行された奴隷の数が1451年から1870年までの間にほぼ939万名に達しているという。それで17世紀にアフリカに世界人口の20％が暮らしていたとすれば、20世紀の初めにはやっと7.7％しかならなかったという。こうした膨大な数の「壮健な働き者」を奪われたアフリカは、今日もその弊害を深刻に受けている。

植民地諸国人民の悲惨な運命について語るとき、アジア諸国人民の運命についても言わざるを得ない。

早くから「日が昇る大陸」として世界で初めて朝鮮の大同江文化、インドのインダス文化、中国の黄河文化を創造した大陸—アジアに植民地奴隷の運命を強要し始めたのは、インドに初の植民地拓植会社である「東インド会社」を設立したイギリス植民地主義者たちであった。イギリス植民地主義者たちは、インドで自分たちを最高の統治者、土地所有者と自認しながら資本主義的搾取方法に伝統的なアジア的統治方法まで結合させ、未曾有の無慈悲さでインド人民を搾取した。

歴史学では19世紀を指して地球的規模での「移民の世紀」と呼んでいる。

その中心が中国とインドであった。統計資料によれば、国外で暮らしている中国人の数は約3000万名であり、世界5大陸の120余りの国で暮らしているという。

植民地奴隷の運命を強要された国と民族は多かったが、朝鮮民族のように40有余年間も人類史上その類例を見ない悪辣な統治を受けた民族はかつてなかった。

朝鮮は1905年11月17日、日本帝国主義による侵略的かつ従属的な「乙巳5条約」のでっちあげにより主権を完全に奪われ、その植民地に転落した。

日本帝国主義は朝鮮を占領した後、武断統治、銃剣統治を実施して朝鮮を一つの「大きな監獄」に変え、朝鮮人民の全ての政治的、経済的及び文化的権利を全部奪い取った。

朝鮮民族はそれこそ民族として生存するか滅亡するかという、運命の岐路に立たされた。

朝鮮だけでなく、世界的な範囲で行われた帝国主義者の植民地的支配と略奪によって世界の多くの民族が歴史の舞台から姿を消し、他の民族も滅族の危機に直面していた。しかし、植民地諸国の人民は、従属を甘受しただけではなかった。

金日成主席が指摘しているように、抑圧のあるところには抵抗があるものである。植民地諸国の人民は積もりに積もった憤怒を爆発させながら、自らの自主性を守るための民族挙げての闘争に立ち上がった。

アジアの3大抗戦

世界の多くの国と民族が帝国主義者の植民地として送ってきた数十、数百年間は、人民大衆にとって受難の時代、暗黒の時代、飢餓の時代であった。

しかし、悲劇の時代をそのまま甘受することができなかった人民大衆は、植民地主義者に反対し、植民地制度を覆すための闘争に奮い立った。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「階級社会の全過程は歴史の創造者と歴史の反動、革命の主人と革命の対象、すなわち勤労人民大衆と反動的搾取階級との鋭い闘争の歴史です」

帝国主義の植民地主義的侵略と略奪に決死の抗戦で答えた世界民族解放闘争史に特筆すべき出来事は、アジアの3大抗戦である。

アジアの3大抗戦というとき、それは1894年朝鮮の甲午農民戦争、1851～1864年中国の太平天国農民戦争、1857～1859年インドのシパーヒー暴動を言う。

この3大抗戦は、19世紀アジア反帝民族解放闘争の蓋を開けた抗戦であると言える。アジアの3大抗戦があった19世紀は、植民地民族は死なずに生きており、民族自主精神は何ものをもってしてもなくすことができないということを初めて世界に誇示した時代であった。

中国で、太平天国農民戦争の始まりと時期を同じくしてインドでもシパーヒー暴動が起こり、アジアの極東に位置した封建朝鮮では、甲午農民戦争が起こった。当時、数百年にわたってすっかり衰えた国力を持って鎖国を固執してきた朝鮮は、無制限な蓄財欲と領土膨張欲に気が狂った列強が虎視眈々機会を狙う侵略の対象となっていた。

米国、イギリス、フランスをはじめとする世界の資本主義列強は、先を争って朝鮮を飲み込もうと、飢えた野獣の如く飛び掛った。

ちょうどそのとき、甲午風雲の寵児—全琫準が「保国安民」「斥洋斥倭」の旗の下に甲午の炎を果敢に盛り上げた。規模や激烈さにおいて、19世紀後半期朝鮮人民の反封建、反侵略闘争で最高峰を成した甲午農民戦争はそもそも、封建的悪政に抗する農民たちの蜂起であった。しかし、清国の朝鮮出兵と日本帝国主義の武力干渉により、この蜂起は反侵略的性格を帯びた民族解放戦争に転換された。闘争の炎は瞬時に全国に拡大され、封建的支配にさいなまれ、外部勢力に蹂躙されるところであった朝鮮人民を呼び起こし、民族自主の気概を轟かせた。22万7千名が参加して全国を揺るがしながら激しく展開されていた甲午農民戦争は、日清両国の内政干渉、指揮者の衰弱性により結局は失敗に終わってしまった。

一方、インドでシパーヒー暴動が起こったのは1857年5月であるが、その動機は牛と豚を崇拝しその油を食べないヒンドゥー教とイスラム教徒に豚と牛の油を塗った弾薬筒を口で開かせたことによってである。イギリス植民地主義者のこうした行為は、インド民族の宗教に対するひどい侮辱であった。こうした侮辱はインド人民の憤怒を招き、その憤怒は激しい反抗と変わった。インド人民の激しい反抗は、一瞬に全国に拡大された。

こうした事態を見てインドに対する植民地統治に深刻な危機がかもし出されたと判断したイギリスの支配層は、イギリスの本土から多くの軍隊を引き入れて暴動を無慈悲に鎮圧した。暴動は失敗したもののその影響力は大きかった。暴動の結果、イギリスのインド支配、広い範囲ではヨーロッパとアジアとの関係において大きな変化がもたらされた。

インド人民の不倶戴天の敵であった東インド会社は、1858年8月2日に解散され、ほぼ2世紀にわたる略奪に幕を下ろしたのである。

19世紀の半ばに起こった中国での太平天国農民戦争は、封建支配層のあくどい封建的搾取と、外来資本主義商品の大量流入により人民大衆の生活状態が悪化された結果起こった。この農民戦争を準備し指導したのは農民出身である洪秀全（1814～1864）と彼が組織した上帝会であった。彼は農民大衆を導いて武装暴動を起こし、太平天国の樹立を宣布した。すぐ大勢力に成長した太平天国農民暴動軍は、各地域で封建政府軍を撃破した。暴動軍は、初期に2万名足らずであったが、南京を占領した後には、100万名の大兵力として成長した。

14年間も続いた太平天国農民戦争は結局、失敗してしまった。

アジアの3大抗戦を契機にして、アジアで植民地民族解放闘争は漸次新しい段階に入るようになった。ならびに世界の民族解放闘争も新しい転換期を迎えていた。しかし資本主義列強の植民地支配を終わらせて、人民大衆の真の闘争の進路を探し、人民大衆が社会の真の主人となる国を打ち立てるまではまだまだ遠くも険しい道を歩まなければならなかった。

指導と大衆の結合

無数の血の跡を残しながらかき分けてきた植民地民族解放闘争、勝利と喜びより曲折がもっと多かった悲劇の歴史を顧み、その教訓を冷静に総括しながらわれわれが感じることは何か。

それはかつてあった奴隷解放闘争、反封建闘争、資本主義に反対する

闘争過程には類似点、共通点があるということである。

一定の歴史的期間でもない長久の間、そして一回や二回でもなく連続的に繰り返される失敗には、必ず共通した一つの原因があると見るべきであろう。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人民大衆が歴史の主体としての地位を占めてその役割を果たすためには、必ず指導と大衆が結び付かなくてはなりません。人民大衆は歴史の創造者ではあるが、正しい指導がなければ、社会歴史発展の主体としての地位を占め、役割を果たすことができません」

指導と大衆の結合問題は、人民の闘争過程で常に提起されてきたが、歴史的に誰も正しく解決していなかった共通の問題であった。実際、この問題を解決することは人民大衆にとって全ての闘争の成功と失敗を左右する要の問題であった。

船の羅針盤のような役割からして決して無視することのできないこの問題を置き、人民大衆は長い間模索してきたが、植民地民族解放闘争の段階に至るまで解決を見ずにいた。

それにより搾取社会において被抑圧人民大衆が奴隷社会と封建社会の転覆のような、深刻な社会的変革を遂行したにもかかわらず、その結実が皆支配者階級に丸ごと渡され、社会と歴史が彼らの意思ではなく、主に搾取階級の意思に従って流れてくるようになったのである。

これらは全的に指導と大衆の結合問題がまともに解決されていないことに根本的原因があった。

正しい指導者のいないところでは搾取階級が「指導者」と名乗り、人民大衆の運命は翻弄される。

歴史を振り返れば、奴隷主、封建支配層は運命の救世主であったのではなく、搾取者、支配者であった。ブルジョアジーも例外ではない。

実際、搾取階級は人民大衆と共に古い社会を覆すための戦いに参加もしたが、いざ政権を握った後は、「旧友」であった人民大衆を裏切って勤労人民大衆の要求ではなく、自らの利益のみを実現する社会、

自分たちだけがいい暮らしのできる社会を作っておいた。

奴隷所有者社会、封建社会、資本主義社会など全ての社会がごく少数の搾取者には天国であったが、人民大衆には地獄であった。

人民大衆は、長い歳月、あたかも社会から見捨てられて道端で冷たい風に当たりながら寒さに震える哀れな孤児のように侮辱と恥辱、社会的冷遇の中で悲惨な生活をしてきた。

孤児は母親を懐かしむ。

かつては人民大衆を保護し、暖かい懐に抱きこむ母親のような人民大衆の保護者、運命の救援者がどこにもいなかった。血を流し、犠牲も多かった平坦でない道を歩んできた人民大衆の曲折の多い歴史に終止符を打ち、人民大衆に歴史の主人としての自主的で創造的な新しい生活を保障してくれる偉人は果たしていつ現れるであろうか。

朝鮮侵略の元凶、伊藤博文を処断して死刑判決を受けた朝鮮の反日愛国烈士安重根（1879.9.21～1910.3.26）はこう嘆いた。

「私を導いてくれる偉人、英雄がいなかった。5000年の歴史を持っていながらも踏みにじられ、蔑まれているわが民族を救い、世界に堂々と押し立ててくれる、そのような不世出の偉人に一度たりとも会ってみたい。……

あ、そういう英雄はいつ現れるだろう」

人民は領袖を戴いていなければならない

この世に生まれた人間なら誰もが母親から生をもらっている。

母親は子どもを生んで暖かい懐に抱いて育て、見守ってくれる生の恩人である。

生を与えただけでなく、寒かろうと、暑かろうと見守り、苦しいときも嬉しいときも抱いて育ててくれるのが母親の懐である。

母親がいれば子どもはこの上ない幸せを感じるのである。それで母親の懐を離れた人生、孤児の人生が一番不幸であるというのではないか。

人民大衆の場合も同じである。
金正日国防委員長の名言がある。
「卓越した領袖を戴いていない人民は、親を失った孤児も同然である」
実に深い意味が込められている名言である。
人民大衆にとって領袖は母親と同じである。
領袖は人民大衆が自らの真の尊厳を守り幸せを花咲かせ、自主的人間の本性にかなった幸せで張り合いのある生を享受するようにする。
それは領袖が人民大衆を目覚めさせ、一つに集合させるからである。
かつて、人民大衆が歴史の主体でありながらも自分の運命を自主的に、創造的に切り開くことができなかったのは結局、彼らの意識水準が低く、組織化されていなかったからである。
それゆえ、人民大衆は搾取と抑圧を甘受しながらそれを宿命として受け入れ、闘争しながらも挫折と犠牲の苦杯だけを飲まなければならなかったのである。
人民大衆が意識化、組織化されて歴史の主体として自らの役割を全うするためには、自らを覚醒させ、一つに団結させる指導者、領袖を戴かなければならない。
人民大衆がどのように革命的に意識化され、組織化された力量として結束されるか、どのように自らの責任と使命を遂行するかということは、思想を創始し、組織を作る領袖を戴き、その正しい指導を受けるか否かに全的にかかっている。
領袖は人民大衆を意識化、組織化して一つの社会的・政治的生命体に結合させ、人民大衆が思想的に、組織的に統一を成すようにする。
領袖は、団結と指導の中心として、人民大衆の運命を開拓する上で決定的役割を果たす。
領袖の役割については、従来の労働者階級の革命闘争史を振り返ってみてもよく分かる。
19世紀の半ばに活動した労働者階級の初の領袖であったマルクスとエンゲルスは、マルクス主義を打ち出して、歴史の舞台に初めて登場した労働者階級に歴史的使命と解放の前途を指し示し、彼らを資本に反対する闘争へと力強く推し進めた。

資本主義が帝国主義段階へと移った新しい歴史的条件の下でレーニンは、マルクス主義を発展させてレーニン主義を打ち出し、労働者階級と人民を帝国主義の牙城を打ち破り、自由と解放を成し遂げるための闘争へと鼓舞し、資本主義から社会主義へと移行する端緒を開いた。
20世紀の偉大な領袖は、金日成主席と金正日国防委員長である。
金日成主席は20世紀の時代と人民大衆の自主的な要求を誰よりも明哲に洞察して偉大なチュチェ思想を創始し、革命の参謀部である朝鮮労働党を創建して人民大衆の自主偉業を勝利へと導く革命的党に強化・発展させることにより、自主性を目指す人民大衆の闘争を新たな高い段階へと発展させ、人類史発展の新しい時代、チュチェ時代を切り開いた。
金正日国防委員長はチュチェ思想を継承・発展させてその生命力を引き続き輝かせ、帝国主義者と反動層の策動によって挫折と陣痛をなめていた自主偉業、社会主義偉業を領袖、党、大衆の強力な統一体で進めていくようにして、その命脈を固く受け継がせた。
今日、朝鮮でその威力を誇示している一心団結は、朝鮮の全ての勝利の要因、万能の武器となってさらなる成果をもたらしており、朝鮮を不敗の社会主義強国に浮上させている。
二人の不世出の偉人たちが積み上げた特出した業績は、今日、世界の進歩的人民の中で惜しみのない賛嘆と羨望を呼び起こしている。
今日、朝鮮人民はもう一人の傑出した指導者金正恩（キムジョンウン）総書記を高く戴き、その周りに鉄のごとく団結して、チュチェの威力で帝国主義者と反動層の反社会主義、反共和国策動を打ち破りながら社会主義強国の建設偉業と人類の自主偉業を力強く進めている。
歴史のあらゆる風波が吹き狂い、難関が重なっても、領袖、党、

大衆が一心団結した朝鮮の前進を誰も、何ものでも阻むことができずにいる。

指導者と党の周りに固く団結している以上、朝鮮人民は歴史の力強い主体として、自らの威力を世界に誇示するであろうし、自らが選択した自主の道、社会主義の道で必ず最後の勝利を達成するであろう。

3）人類歴史の新しい自主時代

前で歴史の主体について解説した。

歴史の主体は歴史の自主的な主体に発展する。

歴史の自主的な主体は、歴史の主体とは異なって、領袖、党、大衆が一つに統一団結した、人類史上最も有力な社会的集団である。

ここではあれほど偉大な歴史の自主的な主体を誕生させた、20世紀に対する話をしようと思う。

20世紀はどういう世紀であったのか。

人によって20世紀に対する理解はまちまちであろうが、私たちは、20世紀こそ歴史上最も自主的な世紀であったと断言する。20世紀に入りながら人類は、チュチェ時代、自主時代という歴史の新しい時代を作り上げた。

金日成主席は次のように述べている。

「現代は、かつて大国の支配と従属の下で抑圧され、蔑まれてきた人民が世界の主人として登場し、自己の運命を自主的に、創造的に切り開いてゆく自主性の時代であると言えます」

この世紀に人民大衆は史上初めて歴史の主人として堂々と登場し、順応と屈従という恥辱のくびきをかなぐり捨て、自主的で創造的な活動で歴史を切り開いていった。

人類の生んだこの偉大な時代は、史上類のない時代として、最も高貴な結晶体、申し子を誕生させたが、それは歴史の自主的主体と社会主義の出現であった。

自主時代の胎動

20世紀に入って世界にはかつてなかった新しい兆しが現れ始めた。それは長久の数世紀の間、無慈悲な搾取と略奪の中で呻吟していた平凡な人民大衆が支配と従属に反対する闘争へ一致決起したことであり、もう一つはそれが世界的範囲に拡大されたという事実である。

これは従来の時代にはなかった歴史的出来事として、大きな幅と深さを持つ変化、一つの大きな政治的地殻変動であった。

確かにそれは、新しい時代の到来を予告するものであった。

20世紀を分岐点として見るとき、去る世紀は一言で言って支配階級が勝手に歴史舞台を闊歩しながら「世界の主人」というベールをかぶって専横と略奪、搾取と抑圧をこととしていた世紀であった。

マケドニア王アレクサンドロスの東方遠征と古代ローマ統治者によるヨーロッパと小アジアの征服、中世の十字軍遠征、コロンブスによるアメリカ大陸の発見とそれによる資本主義列強の貪欲な植民地争奪戦など、大小の征服戦争によって、世界の数億万の人民が搾取と抑圧のくびきをつけて喘いでいた。

その中でもコロンブスの新大陸の「発見」で始まった植民地開拓と、先を争って飛び込んだ資本主義列強の植民地争奪戦は、その程度や範囲において史上類例を見ない、支配者、略奪者の横暴さと野蛮さを見せるものであった。

このような残酷な悲劇は、19世紀になってもなくならなかった。

しかし、20世紀に入りながら、永遠な凍土帯のようであった支配と略奪の世界が揺れ始め、その地殻を抜け出る熱い火炎が激しく噴出し始めた。その火炎の噴出は、社会主義10月革命、そしてその影響による植民地、半植民地諸国での人民の民族解放闘争の急激な高揚であった。

以前のロシアでだけでなく、中国、インド、インドネシア、ベトナム、

ミャンマー、フィリピン、そして朝鮮など、アジア諸国でも反帝民族解放闘争の炎が激しく燃え上がり、世界はたちまち変革のるつぼと化した。

広範な人民大衆が立ち上がり、彼らの闘争が世界的範囲で多様に行われていた壮大なこの現実、これはかつてなかった新しい変化であった。

もちろん過去にも、人民の闘争はあったが、それは一部の階級と階層だけが参加する程度で、その範囲も一部の国、あるいは地方、個別的地域に限っていた。

労働者階級が初めて歴史舞台に登場した19世紀にも都合は同じであった。

当時は発展したヨーロッパの一部の資本主義国で労働者階級だけが独自の政治勢力として歴史舞台に登場し、賃金労働と雇用制度といった、資本に反対する闘争を行っていた。

しかし20世紀に入ってからは状況が完全に変わった。

資本主義諸国の労働者階級だけでなく、植民地、半植民地諸国の数百万の人民も支配と従属、搾取と抑圧をそのまま甘受せずに闘争に決起し、それが一国、一地域の範囲を超えて世界的に広まっていた。特徴上、広範さと多様さを帯びて激烈に行われた人民大衆の革命的闘争と進出は、20世紀を大きく揺るがした。

これに恐れを成した帝国主義者と世界の反動層は、人民大衆の革命的進出を阻もうとあらゆる策動を尽くした。

彼らの闘争は、正しい指導を受けていなかったため、多くの犠牲を出し、失敗と挫折の苦杯を飲み続けていた。

痛ましい失敗と挫折によりひどい陣痛をなめていた20世紀の初め、人民大衆の大衆的な進出は、それを導く偉大な領袖の出現を切に求めていた。

いよいよ20世紀は、そのような偉大な領袖と新しい時代を誕生させた。

自主時代の誕生

歴史上20世紀が新しい世紀として、自主時代として変転してきた行程には、その開拓と前進のために献身してきた偉人たちの労苦が秘められている。

振り返ってみれば百数十年の共産主義運動史は、労働者階級の領袖たちが世界を変革させてきた歴史であった。

19世紀の半ばにマルクスとエンゲルスは、国際共産主義運動の始原を開き、レーニンは、資本主義から社会主義へと移行する端緒を開いた。

20世紀には朝鮮で偉大な金日成主席によって自主時代が立派に切り開かれた。

自主時代の開拓、それは金日成主席が人類史上に積み上げた大きな功績である。

主席は、史上初めて自主時代を開拓し、20世紀を自主で輝かせた偉大な領袖であった。

自主時代の偉大な領袖としての主席の偉人像は、チュチェ思想の創始で集中的に現れている。

金日成主席は、チュチェ思想を創始した10代の少年時期にもはや、1920年代の後半期に新たに現れ始めていた国際情勢の流れを注意深く考察した。

勝利した社会主義10月革命の影響下で激しく展開されていた、労働者階級の革命闘争と植民地、半植民地諸国の人民大衆の解放運動の急速な発展、特に暗黒の大陸、眠っている大陸と呼ばわれていたアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける民族解放運動の急速な高揚は、主席の注目を引いたのである。

金日成主席の著作『朝鮮革命の進路』を見れば、主席が当時の内外の情勢を深く分析し、それを踏まえてチュチェ思想の基本、起点を確立したということが分かるようになる。

主席はこの著作で革命を勝利へと導くためには、人民大衆の中に入って彼らを組織、動員しなければならず、革命で提起される全ての問題を他人に依存して解決しようとするのではなく、自らが責任を持って、自分の実情に即して自主的に解決しなければならないということについて言及した。

著作のこの部分はその後、金正日国防委員長の著作にも記されているように、チュチェ思想の二つの起点として定義づけられた。

チュチェ思想の起点は、20世紀に自主の軌道につながりながら偉大なチュチェ思想を立派に輩出し、その深化・発展としての金日成・金正日主義という豊かな実りをもたらした。

チュチェ思想が創始されたことにより人民大衆は、自分の運命を自主的に開拓する闘争の前途を照らす灯台を持つようになった。

20世紀の歴史は主席が創始したチュチェ思想の要求通りに流れ、主席が起こした自主の熱風は20世紀の全歴史に波及し、歴史を自主の新しい歴史に変えていった。

もちろん自主時代を開拓する道は平坦な道ではなかった。

世界の反動層は人民大衆の自主性を目指す闘争を阻もうと必死にあがいた。

自主時代の偉大な指導思想、チュチェ思想を創始した金日成主席は、帝国主義者と反動層の悪辣な攻勢を打ち破りながら、自主時代を切り開くために献身的に活動した。

自主時代の開拓においてその担当者である人民大衆を自主時代の有力な勢力として作り上げるために力を傾けたことは主席の特筆すべき業績である。

全世界の自主化を目指す闘争における勝利の基本的な裏づけを世界の反帝自主勢力の強化に求めた主席は、非同盟諸国運動と社会主義運動をはじめとする反帝自主勢力を強化するようにした。

世界的範囲で形成された反帝自主勢力は、至る所で帝国主義者の侵略と干渉策動を打ち破るための闘争を激しく展開した。それにより、20世紀にアジア、アフリカ、ラテン・アメリカをはじめとして5大洋6大州には、自主の暴風が吹き始めた。

自主の暴風は、歴史的に譲られてきたあらゆる古いものを吹き払い、20世紀を自主で沸き立つ創造と変革の世紀に変化させた。

植民地、半植民地諸国で民族の主体的勢力による民族解放革命の勝利、後進国での社会主義革命の勝利、帝国主義植民地体制の全面的崩壊と非同盟諸国運動の発展、反帝自主勢力の拡大・強化、これにはチュチェの旗を高く掲げて人類の自主偉業のために献身した金日成主席の業績がこもっている。

実に20世紀は、金日成主席のエネルギッシュな活動によりチュチェ思想が立派に具現されて歴史の自主的軌道がつくられ、それに沿って加速的な前進を遂げ、世界の面貌と時代の内容が根本的に変わった世紀であった。

20世紀が新しい世紀、自主の世紀として輝きを放つことができたのは、全的に金日成主席の創始したチュチェ思想と、主席の優れた活動を抜きにしては考えられない。それゆえ今日、世界の進歩的人類は、主席を「20世紀—自主時代の偉大な領袖」と高く称え、限りなく敬慕しているのである。

「国際金日成賞」の制定は、主席に対する世界の進歩的人民の強烈な敬慕の情の発現であった。

チュチェ思想の信奉者と世界の自主化偉業に寄与した進歩的な人士に授与する最高の国際賞である「国際金日成賞」は、金日成主席の生誕81周年であった1993年4月13日に制定された。「国際金日成賞」が制定されたことは、現代の最も傑出した思想理論家であり、世界の平和と人類の自主偉業の遂行に特出した貢献をした金日成主席の不滅の業績を万代に輝かせていく上で大きな歴史的意義を持つ。

朝鮮人民は主席を錦繡山太陽宮殿に永生の姿で安置した。

主席が指し示した自主の軌道に沿って流れてきた20世紀は、自主時代を切り開いた新しい時代として人類の歴史の一ページに刻まれている。

金日成主席が切り開いた20世紀、自主の世紀は、金正日国防委員長によってより輝くようになった。

平壌宣言

20世紀が暮れてゆく1990年代は、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業が、一時的に試練をなめていた厳しい時期であった。それは自主偉業の高い段階である社会主義が、帝国主義者と反動層の悪辣な反社会主義的策動により陣痛をなめていたからである。

新しいものの誕生と勝利は陣痛を伴う。

社会主義が出現すると帝国主義者と世界の反動は社会主義の影響力を去勢し、それを抹殺するためにあらゆる術策を尽くした。

社会主義諸国に対する経済的制裁と封鎖をしたり、しつこい心理瓦解策動を行ったり、核兵器を振りかざしながら侵略と戦争策動をこととしたりした。

彼らは生々発展していた社会主義に大きな危惧を感じていた。

去る世紀、社会主義は大きな波及力を持って伝播し、世界的範囲で実現されて社会主義体制にまで強化された。

一時期、地球上では世界人口27億のうち約10億が既に社会主義の道に入っていたし、世界領土の4分の1を占める広大な地域に社会主義の旗が靡いていた。

このように大行進曲を歌いながら前進していた社会主義の陣営内で、20世紀の最後の年代を超えながら一つの大きな悲劇的事態が発生した。

それは社会主義の挫折と崩壊であった。

社会主義という20世紀の歴史の機関車がエンジンを止め、脱線した。

もちろんこれは、その真相を解剖してみれば、社会主義を変質させた社会主義の背信者によって招来された結果であった。

にもかかわらず事態の真相を見極めない少なからぬ人々は、これを20世紀の「地殻変動」、第2次世界大戦後最も深刻な「大動乱」と描写しながら、あたかも資本主義滅亡の不可避性と社会主義勝利の必然性が

誤っていたかのように認識し始めた。

世界的にこの事態に対し、論議が紛々とし混乱に陥っていた。この時期に便乗して、資本主義の弁護論者たちは「社会主義の終焉」を喧伝した。

社会主義が挫折するか否かという厳しい歴史的時期に、歴史の運命、社会主義の運命、人民大衆の運命を救う道に出た方は、朝鮮人民の偉大な指導者金正日国防委員長であった。

国防委員長は挫折した社会主義を再建する活動の現状を科学的に診断することから始めた。

病気の社会主義を治すためには、社会主義の現状を正確に診断しなければならなかった。

国防委員長は社会主義と関連した歴史的な古典的著作を連続的に発表し、社会主義の挫折と崩壊について騒いでいる反動層の悪宣伝をぶち壊し、社会主義を志向する世界の進歩的人民に社会主義への新しい方向と科学的な方途を提示した。

『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』『社会主義に対する誹謗は許されない』など、金正日国防委員長は古典的著作を連続的に発表することにより、世界の進歩的人民の胸を再び社会主義の熱気で温め、帝国主義者と反動層を戦慄させた。

社会主義が崩壊した根本原因に対する国防委員長の指摘はまたなんと至当なのだろう。

国防委員長は著作で、欠陥は自分自身に求め、成果は客観に求めるべきであるという金日成主席の言葉を上げながら、社会主義が崩壊した根本原因は主体を強化し、その役割を高めなかったことにあると明快に指摘した。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「社会主義を建設していた一部の国で社会主義が挫折した根本的な原因は、一言で言って、社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解していなかったために、社会主義建設における

主体の強化と主体の役割の向上の問題を基本として捉えることができなかったところにあります」

これは社会主義の生命力が何であるかという、明哲な言葉である。

社会主義が崩壊した国々で主体を強化し、その役割を高める問題を基本として捉えなかったのは、家を建ててからその家に主人がいなかったことと同じ道理である。

主人のいない家には盗人が入るおそれがある。

金正日国防委員長は社会主義建設の主体に関する問題だけでなく、その建設で堅持すべき根本的原則と方途をはじめ、社会主義建設とその発展完成の過程で提起される全ての問題を皆明らかにした。

著作が発表されるや否や世界は社会主義に対する新しい熱気で沸き立ち、進歩的人民は社会主義を再建する闘争を力強く行い始めた。

このような実態を見て国防委員長は社会主義の正当さと科学性、その勝利の必然性を確信した。

一部の国において社会主義は挫折したが、科学としての社会主義は依然として人民の心に生きている。

社会主義は日和見主義によって一時的に心痛に耐えない曲折を経てはいるが、その科学性、真理性によって必ず再生し、最終的に勝利を収めるであろう。

社会主義偉業の勝利に対する確信をもっと打ち固めた金正日国防委員長は、歴史的な著作『社会主義は科学である』を発表して科学としての社会主義の本質とその勝利の必然性を鉄の論理で論証した。

社会主義を危機から救い、その勝利を目指す新たな進路を明らかにするための国防委員長のエネルギッシュな活動はこれだけではなかった。社会主義を志向する世界の進歩的人民の大きな志向と念願がそのまま反映された歴史的な平壌宣言が採択されたのは、人民大衆の自主偉業に積み上げた国防委員長の今一つの特筆すべき歴史的業績であると言える。

平壌宣言は『社会主義偉業を擁護し前進させよう』という題目で、社会主義を志向する世界の進歩的人士たちと人民の大きな期待と関心

の中、1992年4月20日に平壌で発表された。平壌宣言は、社会主義は人類の理想であり、人類の未来を代表する社会、真の人民の社会であることを確認した歴史的な宣言であった。

平壌宣言が発表されるや世界の進歩的政党は、この宣言を「社会主義を志向する政党と人民の念願を反映した闘争の旗印」「国際共産主義運動の統一団結の旗印」「第2共産党宣言」だと高く評価しながら、我先に宣言に署名した。1999年11月初め、当時、平壌宣言に署名した政党の数はほぼ250もあった。

20世紀の自主偉業の偉大な指導者である金正日国防委員長の業績について語るとき、朝鮮に一心団結した不敗の社会主義を立ち上げたことについて指摘せざるを得ない。

国防委員長は朝鮮で人類が理想として描いていた社会主義のモデルを創造し、先軍政治で社会主義を守って自主の命脈をしっかりと引き継がせた。

自主の新しい時代、歴史の新しい時代の偉大な申し子は社会主義朝鮮である。

4）自主的な主体の真の姿ー朝鮮の一心団結

今まで自主の世紀、20世紀の偉大な申し子―社会主義について見た。ならびに歴史の自主的な主体も、20世紀の自主時代の偉大な産物として歴史に刻まれた。

歴史の自主的な主体

歴史の自主的な主体は、人民大衆が自分の運命を自主的に、創造的に切り開いていく過程で形成された、史上最も意識化され組織化された集団である。歴史の自主的な主体は、領袖、党、大衆が一つの組織的、思想的統一体を成した社会的集団である。

史上最も有力な社会的集団として自らの固有の生命力を持って歴史

舞台に初めて登場したこの集団は、その威力と生命力においてどの集団にも比べることができない。
強い組織力と思想的・精神的面貌においてその類例を見ないこの集団が社会主義朝鮮である。
朝鮮の社会主義は、今まで人類史が見たことのない全く新しい世界、全社会が領袖を父親として戴き、一つの大家庭を成している偉大な社会主義である。早くから朝鮮が世人の中で社会主義のモデルとして称えられてきたことから誇るに足る特徴がたくさんあるのは自明のことであるが、その中でも領袖、党、大衆の統一体は、朝鮮式社会主義の第一の誇りとなっている。
朝鮮式社会主義の真の姿を知るためには、その威力と強固さの基礎となっている領袖、党、大衆の統一体、社会的・政治的生命体とも呼ぶこの統一体について知るべきである。
これを分からずには、朝鮮について全部知っていると言えない。これを「特許武器」と言ってよいか、「宝箱」と言ってよいかは読者の判断にお任せするが、とにかく朝鮮式社会主義の全ての成果の秘訣はこれにある。

朝鮮の市民パレード

朝鮮で外国人の特別な注意を引くのは市民パレードである。
朝鮮で市民のパレードは、めでたい祝日を契機にして大盛況裏に行われる。
一般的にパレードは資本主義社会であれ、他の類型の社会であれ、どの国でも行いうるが、朝鮮の市民パレードはその規模と様相において全く特異なものである。
小躍りしながら喉が裂けんばかりに万歳の歓呼を上げながら幹部壇の前を通る群衆。
幹部壇に立って満面に微笑を浮かべ、手を振りながらそれに情熱的に対応する指導者。

指導者と人民が互いに情を交わすこの光景。
それは実に、領袖と人民間の関係がいかに熱く、熱烈なものであるかを見せる崇高なものである。
指導者を中心とする統一団結のこの絵巻を見て世界の人々は一様に感嘆し羨みながら、領袖と人民がどのようにしてあんなに熱く結合されているのだろうか、その秘訣が何であろうかと聞いたりする。

領袖、党、大衆の統一体

その秘訣を知るには、朝鮮の領袖、党、大衆の統一体について知らなければならない。
朝鮮には世界のどの国にもない、領袖、党、大衆の統一体がある。
領袖、党、大衆の統一体とは、領袖、党、大衆が思想・意志的に、組織的に、そして道徳・信義的に固く結集している集団を言う。
領袖、党、大衆の統一体は革命の自主的な主体とも表現され、それが一つの運命共同体であるという意味で社会的・政治的生命体とも表現されている。
朝鮮人民にはあまりにも平凡なこの言葉の意味を、外国の人々が理解するにはやや難しい点があるようで、これについてもっと具体的に話していこう。
ここにひとつのエピソードがある。
1993年5月、朝鮮を訪問した外国のある人士が金日成主席と会見した。
話題は新しい社会建設と関連したものであった。
主席は朝鮮のことわざに「大将一人で戦はできぬ」という言葉があるが、新しい社会を建設するためには、党から強化して中核を育成し、1人が10人、10人が100人、100人が1000人、1000人が万人を育成する方法で大衆を党の周りに固く団結させなければならないと言い、新しい社会の建設における諸問題を具体的に話した。
談話の途中、主席はテーブルの上にある桃を指しながら、領袖、党、大衆をこの桃にたとえて言えば、果肉は人民大衆で桃の種は党で

あり、その核は領袖であると述べた。
物事の理は、対比考察の中でもっと明確に理解されるものである。それこそいいたとえであった。
金日成主席は次のように述べている。
「わが国で領袖、党、大衆は一心団結しています。領袖がいなければなりません。党だけあってもいけません。領袖がいるべきです。ミツバチの中にも女王蜂があり、蟻の中にも女王蟻があります。
党はあくまでも桃のようにつくるべきです」
統一体の原理を桃に比べて言った主席は、団結してこそ国が滅びない、国が滅びればみんな乞食になってしまうと意味深長な話をした。
団結は必ず核のある団結に、党はあくまでも桃のように。吟味すればするほど深奥な意味の込められた話であった。
領袖、党、大衆が一心団結した統一体。
それは一つの中心によって統一され、革命的信義と同志愛の原理によって結合した全一的な集団である。
その中心は領袖である。
世界の万物が核を中心にして成され、運動、発展するように、統一団結を成す上でも核のような中心がなければならない。まさに指導者、領袖が統一団結の中心となっている。
領袖はこの集団の中心の位置で、社会的集団の統一団結を保障しながら、その生命活動を統一的に指揮している。
一方、党は領袖を中心にして組織的、思想的に強固に結合した人民大衆の中核部隊として、この統一体で中枢の位置にある。
領袖と党が中心、中枢となって一つの統一体を成し、血縁的に結ばれた領袖、党、大衆の統一体は強い生命力、自主的な生命力を持っている。
金正日国防委員長は次のように述べている。
「人民大衆は、党の指導の下、領袖を中心に組織的、思想的に

結束することにより、不滅の自主的な生命力を持つ一つの社会的・政治的生命体を成します」
朝鮮人民の社会的・政治的生命体、それは、あらゆる従属から脱して世界と自己の運命の主人として生きようとする自主的な要求を提起し、それを自己の創造的な力で実現していく自主的な生命力を持っている。
今日、朝鮮における領袖、党、大衆の統一体は、一心団結の完璧さと強固さ、人民大衆の自主性の実現における完璧さからして、社会的・政治的集団の最高の典型となっている。今日、人類は歴史に今まで記録されなかったまったく新しい世界、全社会が領袖を慈父と仰ぎ、一つの大家庭を成した偉大な現実を目撃した。
社会的・政治的生命体は、一つの空虚な理論ではなく、朝鮮の生きた現実、生きた絵巻となって、新しい世界をわれわれの目の前に広げている。

一つの大家庭

一般的に人々は家庭と言うと、身近な血肉が集まって生きる社会の細胞であると考える。
家庭で父母はわが子を大切にし、限りなく慈しみ愛する。
父母の真実で永遠な熱い愛によって家庭の親和と幸せが保証される。
朝鮮人民と話を交わしてみれば、朝鮮が一つの大家庭であることを感じるようになる。
彼らの話を聞いてみれば、それがよく分かる。
彼らは「われらの元帥」「母なる党」「わが党」「わが人民」「一つの大家庭」という言葉をよく使う。
言い換えれば、領袖もわれわれの領袖であり、党もわが党、人民もわが人民であるということである。
社会について話すときにも、一つの大家庭だとし、歌詞にまで込めてよく歌っている。

そもそも「わが」「家庭」「母親」という言葉は、父母と子どもという最も親しい血肉の関係でよく使われている言葉である。しかし、朝鮮人民が使っている「わが」「家庭」「母親」という言葉は、指導者と人民間に通用される、一家庭の範囲を超えた親しい意味のものである。

領袖と人民間の関係が家庭内での父母と子どもの間のように、血縁的に、親しく結ばれた朝鮮のこうした現実は、世界のどの国でも見ることのできない独特なものである。

個人主義に基づいて弱肉強食の法則が乱舞する資本主義世界とはあまりにも対照されるこの光景は、朝鮮のどこでも目にすることである。

朝鮮人民は自分の指導者を父親と呼びながら、心から尊敬している。主席と国防委員長の肖像画を家の中に丁重に掲げ、祝日などにはその肖像画に謹んであいさつをし、楽しみと喜びを共にしている。思いがけない自然災害に遭ったときには自らの命より先に肖像画を考え、その安全のために生命まで惜しみなく捧げている。

それだけでない。

身寄りのない老人、障害者、親をなくした子どもたちを引き受けて一家族のように暮らす人々が数え切れないほどであり、作業中不意の状況で危ないときにも自分を犠牲にして同志たちを救援する美しい行いの主人公もまたたくさんいる。

世界的に、多くの国が民族紛争、宗教紛争、領土紛争によって混乱と崩壊に直面していても、朝鮮では何の社会的動乱や混乱も起こっていない。

朝鮮の現実は、領袖、党、大衆の統一体である社会的・政治的生命体が生んだ貴重な結実である。

その偉大な統一体があって、東方の小さな国—朝鮮で空前絶後の社会主義政治方式が出現してその威力を世界に轟かせており、過去「弱小国」と呼ばわれた朝鮮を社会主義強国に浮上させている。

朝鮮人民がこのように領袖を父親として戴き、みんなが一つの大家庭を成しているがゆえに、世界的に多くの国が政治、経済的危機により陣痛と曲折を経ていても朝鮮では全てのことが順調に進められている。

朝鮮人民がどうして「家和万事成」（家庭がむつまじければ万事うまくいく）という言葉をよく口にしているかをある程度理解することができるだろう。

一心団結の威力

一心団結の中に朝鮮の全ての威力がある。それは、朝鮮を強国に支えるしっかりした礎石となっている。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「一心団結は朝鮮革命の大本であり、社会主義偉業を遂行するための強力な武器です。

われわれは領袖、党、大衆の一心団結をもって帝国主義連合勢力の孤立・圧殺策動と経済的難局に打ち勝ち、社会主義の赤旗を守り抜きました」

国家の強大さは、領土の大きさや人口数にかかっている問題ではない。

早くもユゴー・ウィクトルは、「人間の偉大さが彼の背たけによらないように、人民の偉大さは人口数によらない」と言った。

彼の言葉にもある程度一理がある。

一般的に強国になるためには何よりも政治が有力でなければならない。言い換えれば、政治強国になるべきである。

それは、政治が経済、軍事、文化を包括する社会の全般を左右する決定的意義を持つ分野だということと関連する。こういうところから、経済や軍事の分野において大国になろうとしても政治においてまず大国の面貌を備えなければならない。政治が有力でなければ経済や軍事も力を発揮できない。

朝鮮は既に政治思想強国となっており、それに基づいて軍事強国に転換され、今日には経済強国を目指して前進している。これは世界が公認している事実である。

すると朝鮮が政治強国となった秘訣はどこにあるのか。

チュチェ思想は、政治強国になるためには領袖、党、大衆が統一していなければならないと明らかにした。

すなわち領袖、党、大衆の統一体は、政治強国であるということである。これは領袖、党、大衆が思想と意志、心が一つに統一された全一体になってこそ政治強国になれるということである。

政治強国としての朝鮮の面貌、威容は、領袖、党、大衆の一心団結ではっきりと現れている。

領袖、党、大衆の一心団結、それは核兵器よりもっと威力ある武器である。いや、それとは比べられない、この世界で最も威力ある武器である。

20世紀の40年代の半ば、原子爆弾が開発されたとき、世界はその威力に驚いた。それは出現後、厚い鉄の壁にひそんで世界を大きく脅かした。

それで世界各国ではその兵器を手に入れようと努力した。

核兵器を持たなかった国々は、それを持っている国々の威嚇と恐喝に恐れをなし、一つ、二つと屈し始めた。ここでは大きな国も例外ではなかった。

しかし、朝鮮に一心団結という「武器」が現れると形勢は一変した。

単なる物理的な力だけを持っている核兵器の威力は、朝鮮の政治的・思想的威力の前に次第に弱くなり、その優位性と全能さは薄れ始めた。

その端緒を開いたのが祖国解放戦争時期であった。

一心団結の威力で傲慢な帝国主義連合勢力を打ち破った朝鮮人民は、社会主義革命を成功裏に遂行し、1990年代には帝国主義者の専横が極度に至っていた厳しい中でも敵との対決戦で連戦連勝し、朝鮮式

社会主義を固守し発展させて強国に浮上した。

朝鮮を社会の全ての分野で強国の地位に至らしめた一心団結は、その強力な牽引力で全世界を引き付けている。

つとに人々は世界で最も強力なのは核兵器だと言っていたが、今はそれが昔話になった。

領袖、党、大衆が渾然一体を成し、その威力で勝利的な前進を続けてきたわが共和国の誇らしい発展道程を見て世界の人々は、一心団結こそ国力の基本表徴であり、民族繁栄の大本であるという哲理を胸に深く刻んでいる。

一心団結の威力こそ朝鮮を不敗の超大国に支える礎石であり、強固さと不敗性の源泉であり、このような結晶構造はいかなる原子爆弾でも砕くことができないというのが今日の現実である。

3．社会は人民大衆が切り開く道に沿って前進する

ここでは、チュチェ思想が歴史の主体として押し立てた人民大衆が、歴史を切り開きながらどの道をどのように前進するかについてお話しようと思う。

チュチェ思想は、人民大衆が社会歴史の主体という原理に基づいて、社会歴史的運動が人民大衆の自主的で創造的で、意識的な運動であることを明らかにしている。これは社会歴史的運動の本質と性格、推進力を明らかにしたことであり、ならびに自然の運動と区別される主体の運動としての社会歴史的運動の固有の合法則性を解明したことである。

社会的運動の固有の合法則性によって自主的で創造的な道に沿って目的意識的に前進していく社会歴史、これは人類が始めて接した新しい原理である。チュチェ思想の独創性はここでも現れている。

1）社会的運動の固有の合法則性に従って

私たちは金正日国防委員長の著作を読む過程で「社会的運動はそれに固有の合法則性に従って変化、発展します」という文章をよく目にする。

短い文章ではあるが、これには人類社会、人類歴史に対する独創的な解明が与えられている。

およそこの世の万物は、皆それに固有の法則を持っており、それに従って変化、発展する。

法則に即した変化、発展、これはこの世の全ての事象が持っている普遍的な特性である。

自然にも、社会にも法則があり、人間の活動にも法則がある。

自然界には万有引力法則と化学元素周期法則のような無生物世界の法則、遺伝法則のような生物世界の法則がある。

社会も世界の一部分であるため、自然でのように固有の変化、発展の法則がある。

かつて一部の人は自然にだけ法則があると一面的に考えながら、社会でのいかなる法則の作用も否定した。

あるのはただ一個人の気まぐれや恣意的な判断があるだけだと言いながら、ある学者は古代エジプトの女王クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、ヨーロッパの歴史は変わっていたであろうとまで言い、ある人はある后妃の消化不良症とか、気まぐれが戦争のような出来事を起こしうる十分な要因になると言った。

しかし社会歴史的運動の過程は決して特定の個人の気まぐれや恣意的な意思によってこうにもああにもなりうる、偶然的出来事の累積ではない。

歴史が何の法則性もなく、全く偶然的にこうにもなり得、ああにもなり得るなら、どのようにして東西を問わずに多くの国々が類似の発展段階を経ながら今日に至ったのであろうか。これが偶然的な一致であろうか。そうではない。

もちろん社会では事件や出来事が相次いで起こり、これに数多くの人々が関与することからして、その変化が非常に複雑であるのは事実だが、社会には動かしがたい歴史的必然性、法則があり、社会はこうした必然性、一定の法則の統制を受けているのである。

では社会を統制する法則、それはどういうものであるか。

チュチェ思想は、それが主体の運動法則であると教えている。

社会歴史に主体があるということについては既に前で解説した。

社会歴史に主体があるがゆえに、社会の全ての事象は、主体との相互連関の中で作用する。

社会の全ての事象の主体との相互作用、これは社会的運動でのみ

見られる固有の現象である。

反面、自然には主体がないため、こうした特性がない。

自然には客観的に存在する物質があるだけであり、自然はそれらの相互作用によって変化、発展する。

自然に客観的に存在する物質は、相互作用の過程でさまざまな運動法則、言い換えれば、力学的運動法則、物理的運動法則、化学的運動法則、生物学的運動法則を生んでいる。こうした運動法則によって自然は自然発生的に変化、発展するようになる。

客観的に存在する物質の相互作用によって自然発生的に成される自然の運動とは異なり、社会歴史的運動にはこの運動を主動的に導いていく主体があり、それによって合法則的に変化、発展するようになる。

その過程を簡単に見ていこう。

社会では世界を支配、改造し、自己の運命を開拓するための人々の積極的な活動が行われている。

それは大きく、三つの領域に分けられるが、自然改造、社会改造、人間改造がそれである。

人間は何よりもまず、客観的な物質世界に対する支配と改造を実現するために自然改造を行い、その過程で物質的財貨を創造して物質的生活条件を整える。人々が生きていくためには、自然を利用する以外に方法がない。自然をよく利用するということはすなわち自然を改造していくことを意味する。自然を改造して物質的富を創造する活動は、人々の社会的需要を満たせるための活動であり、それは人々の間の社会的協力を通じてのみ実現することができる。社会的協力関係は固定不変なものではなく、歴史が前進するにつれて不断に完成しなければならない。人々は社会改造を通じて社会的協力関係を改善し、完成していく。

自然を改造するのも人民大衆、社会を改造するのも人民大衆である。人民大衆は自然と社会を改造する活動を行いながら自分自身を絶えず改造し、発展させていく。人民大衆による世界の支配と改造は

結局、自然改造、社会改造、人間改造を通じて実現され、人民大衆はそれらの改造の主体となる。

人民大衆は社会的運動の主体として社会の全ての物質的・文化的財貨を創造し、社会関係を発展させ、この過程で歴史の主体としての自らの主動的作用と役割を全うするようになる。

社会歴史の中で発揮する人民大衆のこうした主動的作用と役割が成される過程で社会には自然にはない独特な合法則的現象が現れるが、これを指してチュチェ思想は、社会的運動の固有の合法則性であると指摘している。

チュチェ思想ではこの法則が社会にのみ作用して自然にはないと見ながら、自然の運動は客観的に存在する物質の相互作用によって自然発生的に成されるが、社会的運動は主体の主動的な作用と役割によって発生、発展するという。こうしたことからしてチュチェ思想では主体の主動的な作用と役割による社会的運動法則をただ社会的運動の合法則性とばかり言わないで「固有の」という言葉をつけて、社会的運動の固有の合法則性というのである。

まさに社会歴史は、人民大衆によって行われる社会的運動の固有の合法則性が作用する方向に従って変化、発展する。

では社会的運動にのみ作用する固有の合法則性によって社会歴史がどの道をどのように進むのか。チュチェ思想は社会歴史が自主の道に沿って、創造的性格を帯びて目的意識的に発展していくと明らかにした。

ではそれについて一つ一つ見ていこう。

2）歴史が進む道は自主の道

社会的運動の固有の合法則性について語るとき、まず、社会的運動は人民大衆の自主的運動であるということから見るべきである。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「人類社会の発展史は自主性を擁護し実現する人民大衆の闘争史です」

社会歴史は本質において人民大衆の自主性を実現するための闘争の歴史である。それゆえ社会歴史的運動は自主的運動という特性を持つようになる。

社会歴史的運動が人民大衆の自主的運動であるというこの原理は、歴史の主体である人民大衆を中心に据えて社会歴史的運動を考察したチュチェの社会歴史観の主要原理である。

振り返ってみれば、この世の全ての生命体は、それに固有の生存方式、生存法則に即した道を持っており、その道は数え切れないほど多い。

その数千数万の道は、その模様と形態、種類がまちまちである。

自然界でのように人間社会にも道がある。

多くの人が世の中の風波をかき分けながら歩んで行った人生の道もあり、社会歴史が流れてきながら残した歴史の道、そして人間が自然を征服する過程でつくられた自然開拓の道もある。

人間社会が行く道はその主体である人民大衆が開いていく道であり、それは環境と条件にただ順応する道ではなく、その従属に反対していく道、自主の道である。

自主性は人民大衆の本性的要求であり、それゆえ社会歴史は人民大衆が要求する方向、自主性が実現される方向へと進むに決まっている。

人民大衆は社会歴史を切り開いた初の日から自然界の存在のように自然の条件と環境にただ順応ばかりしようとせず、それとは異なって、あらゆる束縛と従属に反対して闘ってきた。

この過程で人民大衆は世界になかった新しい道、自主の道を開き、その道に沿って自分の運命を切り開いている。

それでは歴史の主体である人民大衆が切り開いた道、自主の道はどのようにしてつくられるようになったのか。

それは彼らが抱いていた世紀的念願にその端をおいている。

世紀的念願

人間は社会をつくりながら多くの夢、念願を持つようになったが、その中でも自主の念願は、社会が階級に分かれ、搾取する者と搾取される者が生まれながらもっと強烈になり始めた。階級社会が存在した全期間、人民大衆が抱いていた念願のうち、最も強烈なのは自主の念願であった。

人民大衆の抱いてきた念願は一つや二つではなかったが、自主の念願のように彼らの心の中に深く根付いたものはなかった。

それで、まず自主の念願とはどういうものであるかについて触れようと思う。

自主の念願、それは歴史と自己の運命の主人として生き、発展しようとする人民大衆の崇高な念願である。

自主の念願には従属と支配、屈従、妥協がない。それは、他人を支配したり、他人に屈従し、また自主権を蹂躪されながらまで卑屈に妥協したりするようなこととは全く縁がない。

金日成主席は生前にこの世に他人に従属して生きるのを好む人はいないと言っている。

ここに一つのエピソードがある。

かつてインドで独立運動が盛んに行われていたとき、ある独立運動家はこういう質問を受けたという。イギリスがインドから手を離すとインドの人々はもっと困難な生活をするようになるであろうが、それでも独立する必要があるのか。その独立運動家は、仮に私たちが裕福な生活ができないとしても、私たちだけで暮らすのがいいからイギリスはインドから出て行けと言ったという。

民族的独立の話であるが、われわれに示唆することは少なくない。ここでわれわれは、この世のどの国や民族であろうが、ひとえに願うのは自主であって、従属ではないということを感じるようになる。自主の念願はそれを実現する理想社会を立てようという強烈な志向である。

人民大衆は早くから自主の道を歩みながら自らの自主性を貴重にし、それを真実に実現してくれる社会、あらゆる搾取と抑圧のない、全ての人々が平等で互いに睦まじく生きていく理想社会を描いてみた。

従属と抑圧がなく、自由で幸せに生きようという念願を実現しようと、人民大衆は時には、神仙の国へも行ってみようとし、神の天国を仰ぎながら宗教的安息を求めてみようともした。

「理想国」だの「天国」だのというものも皆荒唐無稽な夢に過ぎなかったし、そこには善良な神仙や、慈悲深い神様ではなく、その仮面をかぶった搾取者、支配者が君臨していた。

それで人民大衆はこれら全てが悪いということを悟り、搾取階級と制度に反対して闘ってきたのである。

人民大衆の自主の念願は、人間であるなら誰もが持つ共通の念願であるだけでなく、歳月が流れるほどより強烈になる念願である。

数千年の間、世の中の風波に当たり試練をなめながらもその念願は歴史の流れとともにより強烈になった。

かつて搾取階級は、あらゆる甘言を弄して人民大衆の自主への念願を抑えようと手段と方法をいとわなかった。甘言でなだめたり、それが利かなければ暴力的方法を使ったり、人民大衆を封建社会、資本主義社会へと引っ張って行ったりもした。しかし全ての試みは、彼らの自主の念願に合わないことからして否定され、彼らの激しい自主的闘争と抵抗によって水泡に帰した。

人民大衆の自主の念願はこのように支配と従属を許さず、社会の進歩を目指す闘争の中でより強烈になる。

チュチェ思想はこの人民大衆が願ってやまなかった自主の念願を貴重にし、それを自らの思想理論の中心に据えてそれを実現することを自らの根本使命として押し立てた。

だけでなく自主性を実現するための道、社会主義への道までも科学的に解明している。そのことからしてチュチェ思想は、自主の思想としてさらに世界に光を放つようになり、今日には全世界の進歩的人民が

熱烈に信奉する世界的な思想となったのである。

ひと時、宗教が世界的に広がったが、チュチェ思想が今日、それに比べようもなく全世界を自主で染めながら急速に伝播している秘訣の一つがここにある。

今、世界的にチュチェ思想研究組織と信奉者隊列は引き続き拡大されており、世界的規模で多くの国の人民が自主性を求めて力強く闘っているのはその確証である。

チュチェ思想が指し示す道、自主の道に沿って進むのは今日、阻むことのできない時代の流れとなっている。

社会改造に自主の活路がある

ここでは人民大衆の自主性を目指す闘争の領域とその相互関係について解説しようとする。

自主の道は決して平坦な大道ではない。

それは、複雑多難な幾多の試練の峠を越えなければならない険しい道である。この道には厳しい自然の束縛もあり、不合理な社会制度の束縛もあり、人民大衆自身が持っている思想的、文化的桎梏もある。

人民大衆はこのような自然と社会、自分自身の束縛に反対し、自主性を実現するために、この三つの分野でそれを実現するための闘争を展開するようになる。

社会を改造する闘争を通じて人民大衆は、階級的及び民族的従属から脱して社会的・政治的自主性を実現し、自然と人間を改造する闘争を通じて人民大衆は、自然の束縛と古い思想、文化の束縛から脱して自主的な生活を享受しうる物質的及び思想的、文化的条件をつくるようになる。

歴史的事実は、人民大衆が行う全ての形態の社会的運動が自主性を実現するための運動であることをはっきりと見せている。

史上自主性を目指す被抑圧勤労大衆の初の進出と言える奴隷暴動と中世の農民たちの反封建闘争により、奴隷制度と封建制度が崩壊

して勤労人民大衆の自主性を目指す闘争では大きな前進が遂げられた。一方、自然改造、人間改造のための闘争を通じて物質的財貨と思想的、文化的財貨が多く蓄積され、蒙昧と無知からはるかに脱するようになった。

このように自然と社会と人間を改造するための全ての社会的運動が、人民大衆の自主的志向と要求を実現することを志向してきた。

ではこの3大改造は、どういう順次性、方式で行われるようになるのか。それは社会歴史的実践の要求に即した一連の順次性を持って行われる。

3大改造の順次性は、それぞれの歴史的時代と当該の社会が処した環境を考慮して定めなければならない。

時代と環境を考慮せずにただ自然改造、人間改造、社会改造が皆同時に行われるとか、機械的にどの一つが完全に終わってから他の改造が行われると見てもならない。

社会発展の実践的過程としての社会主義を建設する問題を設定して考察してみよう。

社会主義革命を行う時期には搾取と抑圧を一掃して人民大衆の社会的・政治的自主性を実現する問題、言い換えれば、社会改造問題が前面に出るようになる。

それは、搾取社会には人民大衆の自主性を蹂躙する主な桎梏、階級的及び民族的支配と従属があるからである。支配と従属の社会関係が一掃されずには自然改造の担当者である人民大衆が、自分の労働の結果を享受することのできない境遇におかれるようになる。人民大衆は社会的・政治的に束縛されている状態では、いかなる自然改造活動にも関心を持たなくなる。従って優先的な活動は、社会改造のための社会革命を行うべしとの結論に帰着するようにある。

社会革命により搾取制度が一掃され、進歩的な社会制度、社会主義制度が確立されれば、自然改造、人間改造により有利な条件がつくられるようになる。

社会主義社会では社会の全ての構成員が等しく国家と社会の主人となっており、それによって同志的協力と団結が社会関係の基本となる。

搾取社会が覆され、社会主義社会が樹立すれば、支配階級、搾取階級が階級として一掃されて階級的対立がなくなり、親善的な二つの階級である労働者階級と農民をはじめとする社会の全ての勤労者たちが、ともに社会主義的勤労者として互いに利害関係が一致するようになり、従って、同志的協力と団結が成されるようになる。これは、人民大衆が自然改造、人間改造の課題を前面に提起して遂行するのに有利な条件となる。

ここで金日成主席が外国の友人たちと会って交わした話を一つ紹介しよう。

それは、産業革命とアジアに対する話である。

1981年10月上旬、アジア地域チュチェ思想研究所の所長、ティ・ビ・ムケルジを団長とするインド学者代表団を接見した際、金日成主席は、アジア諸国は産業革命をしなかったため、結局は、発展した諸国の植民地になってしまったと言った。主席は続けてその原因に対する彼の質問に、かつてアジア諸国が産業革命をしなかったのは、封建統治制度があまりにも強かったためである。言い換えれば、強い封建統治制度が人々の創意性を強く抑制したことにあると謹厳な語調で言った。

強い封建統治制度による人々の創意性の抑制。

かつてアジア諸国が世界的な流れから立ち遅れるようになった原因を一言で明哲に分析する主席の話に、ムケルジは歓声でも上げたい気持ちになった。

主席が教えたように、社会改造は自然改造、人間改造の活路を開く関門であると言える。社会を改造してこそ自然改造、人間改造が何の社会的束縛も受けずに有利に行われる。

社会改造は根本において社会主義革命である。

それは社会主義革命を除いたその以前のどの革命も、それほどの条件と環境を保障することができなかったからである。封建制度は言うまでもなく、資本主義社会も人々を堕落させ、自然環境を破壊することによりその改造と発展の道をさえぎる。

社会主義だけがそれに有利な環境と条件を保障してくれる。

社会主義制度が樹立した後、自然改造と人間改造は、思想、技術、文化の3大革命を通じて遂行され、社会改造は革命的な方法ではなく、社会主義制度を強化、発展させる方法で行われる。

時代の流れ、全世界の自主化

今日、人民大衆の自主性を目指す闘争は一つの時代的な流れとなった。

金日成主席は次のように述べている。

「現代は自主性の時代です。かつて抑圧され、蔑まれた人民が世界の主人として登場し、歴史を力強く推し進めており、自主性の激しい潮流が世界の全大陸に打ち寄せています。人民が自主性を要求し、自主の道に進むのは現代の基本的趨勢です」

実際、現代の歴史を見れば、民族国家を成している今日の世界で全ての国と民族が自主性を志向しており、世界的範囲で自主性を目指す闘争が激しく展開されている。

早くからマルクスによって切り開かれた労働者階級をはじめとする被抑圧人民大衆の解放偉業は、20世紀に至って、新しい段階に入った。その後、マルクスの偉業に忠実であったレーニンは、レーニン主義を打ち出し、その旗の下に社会主義10月革命を導き、地球上に初の社会主義国家を打ち立てた。

社会主義が出現して今日に至る間、世界革命偉業を遂行する過程ではあれこれの紆余曲折はあったが、自主偉業、社会主義偉業は勝利のうちに前進し、世界的範囲で植民地体制が崩壊され、人民大衆の自主的要求を具現した反帝民族解放運動と非同盟運動、世界平和愛好運動がより幅広く、深みを持って展開されてきた。

今日、世界情勢の流れを主導するのは、あらゆる搾取と抑圧、従属と不平等に反対し、自主的で平和な、親善的な新しい世界を建設するために闘争する、革命的人民の自主偉業である。

自主化が時代の流れとなってはいるが、それを自然の川の流れのように放任しておいてはいけない。

世界の進歩的人民は団結した力量で、世界的範囲で自主性を実現するための闘争を能動的に行っていかなければならない。言い換えれば、世界の自主化を目指す闘争を行っていかなければならない。まさにここに、あらゆる侵略と戦争を防ぎ、平和と進歩、自主性を実現する真の道がある。

チュチェ思想には、世界を自主化する上での全ての問題が科学的に解明されている。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「自主化された世界は、支配と従属、干渉と圧力のない世界であり、全ての国と民族が自己の運命の主人として自主権を完全に行使する世界である」

世界を自主化するということは、世界の全ての国がいかなる列強や支配主義勢力にも従属されず、服従しないで、徹底的に自主的な道へと進むということである。

世界の自主化は人類共通の偉業である。

世界の自主化を実現するには、自分の自主性が蹂躙されることにも反対しなければならないが、人の自主性が蹂躙されることにも反対しなければならない。

隣の家の火災を放任すれば、自分の家にも火災が移りうるということは、初歩的な理である。

世界の自主化は、帝国主義、支配主義との闘争を伴う。花壇に毒草があれば、他の花に害を及ぼす。

帝国主義、支配主義は世界的範囲で起こっている全ての災難と不幸の根源である。

帝国主義、支配主義がある以上、世界は平和であり得ず、人民は自由であり得ない。

帝国主義者は機会さえあれば他国の内政に干渉しており、時には破廉恥な武力侵攻もためらわない。これにより世界の多くの国と民族の自主性が乱暴に蹂躙されている。こういう状況の下で、帝国主義に反対して闘争せずには、人民の志向と念願を決して実現することができない。それゆえ自主の旗を高く掲げて帝国主義に反対して闘うことによって世界の自主化を実現しなければならない。

世界が自主化されれば、新しい世界戦争を防止して世界に強固な平和と繁栄を実現することができ、全ての国と民族が繁栄する新しい社会を建設して人民大衆の自主性を実現する広い道が開かれるようになる。これは自主性を目指す人民大衆の闘争で一つの転換点となるだろう。世界の人々が今日、世界の自主化を共通の闘争綱領として押し立てて闘っているのもこのためである。

偉大な自主の思想であるチュチェ思想があるがゆえに、あらゆる搾取と抑圧がなく、全ての人々が自由で平和な世界で幸せに生きようという人類の世紀的な念願は必ず実現されるだろう。

3）人類歴史の道は物静かな小道ではない

この部分では社会歴史的運動は人民大衆の創造的運動であるということについてお話しようと思う。

前述の社会歴史的運動が人民大衆の自主的な運動だという原理が、社会歴史的運動の本質を明らかにしているというなら、社会歴史的運動が人民大衆の創造的運動であるという原理は社会歴史的運動の性格を解明している。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「社会歴史的運動は自然と社会を改造し、変革する人民大衆の創造的運動です」

社会歴史的運動が人民大衆の創造的運動であるということは、この運動が人民大衆の創造的活動によって自然と社会を改造、変革し、人民大衆自身を力強い存在に育成する過程であることを意味する。

社会歴史的運動は、自然と社会を自らの自主的な要求に即して改造していく人民大衆の創造的活動によって前進する。

自主を目指していく人類歴史の道は、静寂の立ちこもった、物静かな小道ではない。うっそうとした樹林があるかと思えば、池や泥、険しい茨の道も少なくない。

この険しい地帯を突破するには、それを切り抜ける力が必要である。もしそれがなければ、人民大衆は前へ進むことができない。

それを切り抜けるためには、力強い手段が必要である。

人民大衆の自主的要求を実現する場合にも同じである。

自然と社会、人間を束縛する全てのものをなくして自主性を実現する活動は、壮大な活動であり、この活動を成功裏に行っていくためには、創造的活動を行わなければならない。

人民大衆が自己の自主性を実現するためには、創造的活動を行うしか他に方途はない。

自主性を実現する上で一番よい方途は、創造である。

人民大衆の創造的活動過程は追い風に帆をつけた船のような場合とは異なり、闘争を伴う。

かつて人民大衆が曲折の多い道を歩まなければならなかったのは、一言で言って歴史を前進させるための彼らの創造的活動が闘争を伴ったからである。

闘争なしには古いものがなくならず、新しいものの創造があり得ない。とりわけ古い社会制度を新しい社会制度に変え、人民大衆の社会的解放を遂げていく過程は、熾烈な階級闘争の過程である。

古い制度、古い勢力を保存しようとする勢力は、おのずからその地位を譲るのではない。

古い勢力をなくすための闘争を通じてのみ新しい制度、新しい生活を

創造することができるのである。
朝鮮での抗日武装闘争の経験がそれを見せている。
去る世紀の初め、朝鮮が日本帝国主義の植民地になった後、その解放を渇望して愛国の士は「朝鮮の独立に関する請願書」を持ってパリへと、ハーグへと奔走しながら請願や絶叫もし、赤手空拳で町にて声の限り万歳も叫んでみたが、与えられたのは監獄や絞首台、血の海だけであった。
このような現象はインドでも現れたが、その代表例がマハトマ・ガンジーの非暴力・不服従運動であった。彼の主張した非暴力・不服従運動の骨子は「サチャグラハ」運動であったが、断食、菜食、不殺傷、禁欲などの形態であった。
暴力を行使する権力に非暴力で立ち向かおう。行動の過程に警察の棍棒に殴られ、足に蹴られて頭が割れ、血を流しながら倒れても誰も前進を止めたり倒れてはいけない、倒れた人に代わって次の人が前進を続けよう。
敵の無慈悲な鉄拳に赤手空拳で抵抗する光景は、あたかも英雄的な行動に見えるかも知れないが、それこそ狼の前に立っているウサギのようではないか。生きたまま狼に食われるしかない。
暴力には暴力で、武装には武装で、これだけが民族の運命を救う唯一の方途である。
これは総体的に見て植民地民族解放闘争は平和的方法ではいけず、ひとえに人民大衆の革命的暴力で遂行されなければならないということを見せている。
こうした教訓から朝鮮人民は、金日成主席の指導の下に日本帝国主義に反対する武装闘争を展開した。
朝鮮の革命家たちは確信した。
人民大衆を一つに決起させ、兵士を育て、兵器を揃えて戦えばいくら強敵であっても優に打ち倒すことができるということである。しかし実際、その戦いは実に困難な闘いであった。何よりも、勢力対比上

雲泥の差を持つ戦いであった。
その差があまりにも大きくて人々は、カマキリが車輪の前に立ちはだかっている格好だとも言い、日本帝国主義は、抗日遊撃隊を「滄海の一粟」だとも言った。他人はなんと言おうが、朝鮮人民は恐れることなく挑戦した。
覚悟を固めて出るなら、鬼も道を譲るという言葉がある。
武装を手にして決死の覚悟で戦えば、方法も生じ、道も開かれる。
抗日武装闘争の時期の密林の中の兵器廠に対する話をしようと思う。
その時一部の人は、ソ連の援助で遊撃根拠地に手榴弾工場を建てようとしてソ連に要請した。全世界の共産主義者たちがソ連を人類解放の灯台として仰いでいたときであった。ところがソ連側はこの要請に何の回答もよこさなかった。要請を受け入れるという約束も、それは困難だとか、不可能だという通知もなかった。
このことをおいて金日成主席は、自力更生しなければならないという強い決心を持つようになった。
遊撃隊と人民を動員して、自分の力を信じ自力更生で兵器廠をつくり、兵器の製作に必要な工具と火薬を自力で作って保障するようにした。
そのときを回顧して金日成主席は次のように述べている。
「自力更生は……わが国の民族解放闘争史上初めて、無から有を作り出す新しい時代を開いた。この生気に満ちた時代相は、何事であれ人民の力と知恵を最大限に引き出して切り開いていく共産主義的方法が、いかに正しく有力であるかを実証する生きた絵巻と言える」
抗日戦が展開されるにつれて、兵器も増え、経験も積まれて、抗日遊撃隊は決して弱くない武力に成長していった。その存在について日本帝国主義は「東洋平和の癌」だと悲鳴を上げ、結局はそれによって滅亡した。
こうして朝鮮は開放された。

実に多くのことを物語る話である。

自主は決して神仙の国になる実ではない。

自主性を守るためには創造と変革の武器を手にしなければならず、人民大衆がそれを自分の力で獲得しなければならない。

金日成主席の名言でこの部分の話を終えようと思う。

「歴史には強大国が小国に同情し、弱小国の人民に自由と独立をプレゼントした前例などない。民族の自主権はもっぱらその民族自身の主体的な努力と不屈の闘争によってのみ保全し、獲得することができるのである。これは世紀と世代を経て、歴史によって検証された真理である」

4）歴史を推し進める偉大な力

前で人民大衆が主体となっている社会歴史的運動の本質と性格が何であるかについて解説した。社会歴史的運動は人民大衆の自主性を実現するための運動であり、人民大衆の創造的活動によって行われる運動である。

では人民大衆を社会歴史的運動へと推し進める力は何であるかという問題が提起される。

人民大衆を社会歴史的運動へと立ち上がらせ、闘争するように進める力を推進力という。

チュチェの社会歴史原理は、人民大衆の意識的な闘争によって社会歴史的運動が推進されるということについて明らかにしている。

金正日国防委員長は次のように述べている。

「革命は人民大衆の意識的な闘争によって推進され勝利します」

人民大衆は自主性を実現するための創造的活動を目的意識的に行っていく。人民大衆の目的意識的な活動によって世界を改造し自分の運命を切り開くための自主的で創造的な活動が推進される。

ある外国人との談話

1992年3月31日、日本「朝日新聞」編集局長が朝鮮を訪問して提起した質問に、金日成主席は回答を与えた。

その時、編集局長は金日成主席に次のような質問をした。

「遠からずして誕生80周年をお迎えになる金日成主席は、60余星霜、朝鮮革命を導き、世界革命に大きな貢献をなされました。その過程で最も深く感じた問題はどのようなことでしょうか」

金日成主席はまず、彼が朝鮮を紹介するよい記事を少なからず掲載してきたことに謝意を表し、次のように述べている。

「ご承知の通り、私は長い期間にわたって、あらゆる従属と束縛を排し自主的に生きようとする人民大衆の願望を実現するために闘って来ました。その過程で幾多の試練と難関に遭遇し、永遠に忘れられない喜びや悲しみを数多く体験しました。

……

……私が言いたいのは、人民大衆の自主性を実現するために闘う人は当然、人民の自主的な思想・意識の向上に第一義的な注意を払わなければならないということです。

……

人間の運命を切り開く上で、客観的条件や環境も重要な作用をするのはもちろんですが、決定的な役割を果たすのはあくまでも人間です。人間が決定的な役割を果たすというのは、つまるところ人間の思想・意識が決定的な役割を果たすということを意味します。往々にして、人間の役割を高める上でその創造力を発展させることが重要であることはかなり強調されますが、目に見えない思想・意識がより重要な働きをするということにはさほど注意が向けられていません。人間の創造力も思想・意識によって規制されます。人間が自分の自主的要求に即応して創造的に活動できるのは、自主的な思想・意識を持っているからです。人間の創造力の発展に限界がない

ように、自主的思想・意識の発展にも限界はありません」

主席の一生の貴重な経験が含蓄されているこの意味深い教えには、社会の発展を推進する決定的要因が何であるかが明白に闡明されている。

創造力より目に見えない思想・意識がより重要な作用をする。そのため人民の自主的な思想・意識を向上させるのに優先的な注目を払わなければならない。

では思想・意識が創造力よりなぜ重要であるかについて見ることにしよう。

人々は自然と社会を改造する社会的運動を行いながらそれを把握し、改造する能力としての一定の創造的能力を発揮するようになる。

しかし人によって、その創造的能力を発揮する方向と程度はそれぞれ異なっている。

同じ創造的能力を持っていても、ある人はそれを最大限発揮するかといえば、ある人はそれを適当に発揮したりする。一方、それを社会的進歩と先進階級の利益のために使う人がいるかと思えば、それを社会の発展を阻害し搾取階級のために使う人もいる。

その理由はほかでもない。

それは、人によって持っている思想・意識が異なっているからである。

思想・意識は人間の要求と利害関係を反映したものであり、科学技術知識で代表される創造的能力は、事象の本質と運動法則を把握し、それを活用する能力である。

人間の要求と利害関係を反映していることから思想・意識は人々の活動の目的と方向、闘争で発揮される意志と闘争力を規制するようになる。創造的能力はそれを裏打ちするが、それは人間が押し立てた目的と方向、意志と闘争力によって一定の方向で発揮される。

人々が自分の持っている知識と技術を何のために、どのように使うかは、全的に人々の思想・意識によって決定される。

原子核が分裂するとき、莫大なエネルギーが放出されるということは、原子という物質そのものの性質を反映した知識であるが、原子エネルギーを電気生産に使うか、でなければ爆弾を作るのに使うかを決心するのは原子エネルギーに対する人間自身の要求と利害関係を反映した思想なのである。

こういうことから思想・意識は創造的能力より自然と社会を変革する人々の活動で重要な役割を果たすというのである。もちろん人間の活動において知識も重要な推進力として作用するが、それはあくまでも思想・意識の規制の下に人間の活動に影響する。

こういうことから金日成主席は思想・意識がたとえ目には見えないが、創造的能力よりもっと大きな役割を果たすと言ったのである。

自主的な思想・意識

金正日国防委員長は次のように述べている。

「自主的な思想・意識は、人民大衆の自主性を目指す革命運動において決定的な役割を果たします」

人類と歴史の発展を促す上で決定的役割を果たす思想は、ほかならぬ自主的な思想である。

自主的な思想・意識は、自分の運命の主人としての自覚であり、自分の運命を自らが切り開いていこうという意志である。

自分の運命の主人としての自覚は、自分の運命を支配する存在が自分自身であるという確固たる認識である。

自分の運命を自らが切り開こうという意志は、自分の力で自己の運命をあくまでも切り開いていこうという覚悟と決心である。

人民大衆の運命を切り開くための革命闘争で決定的役割を果たすのは、自主的な思想・意識である。

自主的な思想・意識が果たす決定的役割は次のようなところで現れる。

それは何よりも人々をして自然と社会に対して正しい態度と立場を

持ってそれを変革するための闘争に積極的に奮い立つようにするところで現れる。

一つ、実例を挙げてみよう。

かつてワットの蒸気機関が新たに出現したときであった。

蒸気機関は産業革命の端を切る上で大きな役割を果たした機械であった。

資本家たちは、当時、この機械を持って産業を発展させながら、労働者たちの血と汗を過酷に搾り取った。それで労働者たちは一日に15時間以上、骨の折れる労働をしなければならなかった。生産物は以前に比べてはるかに多く生産されたが、彼らには最低賃金にもならない非常に少ないものが配られた。労働者たちは「新しい機械が私たちを殺そうとする」と言いながら自分たちが苦労しながらも貧しく生きる原因が機械にあると考えた。こうして機械を壊す闘争が行われるようになったが、それがいわゆる労働者階級の「機械打ち壊し運動」であった。

一方、機械を独り占めしていた資本家たちは、政府の力を発動して、「機械を壊す者は死刑に処する」との厳しい法律を公布し、労働者たちを無慈悲に弾圧した。

これを目撃した労働者たちは、機械を壊すことでは自らの生活を改善することができないということを悟り始めた。

労働者たちは機械ではなく、資本家に反対して闘争しなければならないと認識し、労働時間を短縮し、賃金を引き上げることを要求して資本家たちと対抗した。こうして労働者たちは時には労働時間を少し短縮してもらったり、賃金を引き上げることに成功したりもした。

しかし、これによって労働者たちの境遇が根本的に改善されたのではなかった。それは資本家たちが国家政権と生産手段を掌握し、相変わらず労働者たちを抑圧し、搾取していたからであった。

労働者たちは、時間が経つにつれて段々自らの境遇を根本的に改善するためには、個別的な資本家ではなく、資本家階級全体に反対し、

資本家階級が依拠している資本主義制度を転覆しなければならないという自主意識で武装するようになり、とうとう組織的な闘争に立ち上がり、資本主義社会を覆し、社会主義社会を樹立することができたのである。

こうした歴史的事実は、自主的な思想・意識が人々をして社会と歴史に対する正しい立場を持って、社会を変革する闘争に奮い立たせることにより、歴史の発展を積極的に進めるということを見せている。

また自主的な思想・意識は、革命運動で発揮される人々の意志と闘争力を規制することを通じて、革命運動を積極的に推進する。

人々がいかに強い意志と闘争力を発揮するかは思想にかかっている。大衆の革命的能力は無尽蔵であるが、思想的に目覚めていなければ、それが高度に発揮できない。

思想的に目覚めていない大衆は搾取と抑圧を受けても革命闘争に奮起することができず、革命闘争における小さな難関や試練の前でも屈するようになる。

自主的な思想・意識で武装した大衆だけが革命闘争でしっかりした立場と態度をとることができ、強靭な意志を持って革命闘争に積極的に参加してあらゆる難関と試練を乗り越え、最後まで闘うことができる。

思想の強者が多い国―朝鮮

世界に存在する国々は皆、自国固有の自慢を持っている。世界には原油資源の豊かさを誇る国もあれば、広大な領土を誇る国、経済と技術の発展を誇る国もある。

朝鮮は思想の強者が多いことで世界に名高い。

思想活動を優先させることを社会主義偉業遂行の必須の要求として打ち出した朝鮮は、久しい以前から思想活動に優先的な力を払ってきた。

前でも見たように、思想が創造的能力より決定的な役割を果たすということは歴史の真理である。

もちろん、知識経済時代に入った今日、コンピュータをはじめ、情報科学技術に精通した科学技術人材をたくさん育成すべきである。これは、国力を強化するための重要な活動である。だからといって、思想をないがしろにし、思想活動に優先的関心を払わなければ、手間をかけて育成した人材たちが誰のために、何のために働くかも知らなくなる。こうなれば彼らは、国の富強のために精を出して働くのではなく、自分個人の安楽と享楽だけを追求し、甚だしくは外国を見上げながら国と民族を裏切ることもしかねない。

思想の貧困は政治の貧困と破滅をもたらす。

思想を重視し、それに優先的な関心を払ってこそ国が富強になり、人民大衆の自主性を実現しうるということは、過ぎ去った20世紀の歴史が教えている貴重な教訓である。歴史のこの貴重な真理が正しく植えつけられた国がまさに社会主義朝鮮である。

朝鮮ではチュチェ思想の旗を高く掲げて闘う過程で、多くの思想の強者を育て上げた。

チュチェ思想が創始されたときから勝利だけを刻んできた朝鮮革命の歴史には有名無名の思想の強者が多く記録されている。抗日武装闘争時期に抗日革命闘士が多く育成され、祖国解放戦争時期には多くの勇士が英雄朝鮮の名を轟かせ、社会主義革命と社会主義建設、とりわけ苦難の行軍、強行軍をした去る世紀の90年代にも革命的軍人精神で武装した多数の思想の強者が輩出された。このような思想の強者の大部隊を持っている朝鮮は、20世紀に次いで21世紀にも帝国主義者のあらゆる挑戦と妨害策動を退け、自分のしたいことをしながら自主の道、社会主義の道に沿って力強く前進しているのである。

チュチェ思想の原理解説 2

人類の社会を明るく照らすチュチェののろし

執　筆 ： 呉成哲
編　集 ： 安鉄鋼
翻　訳 ： 李鮮日
発行所 ： 朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日 ： 2026年4月

ㄱ-260880489453

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2829-3
9 789946 028293 >

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2026